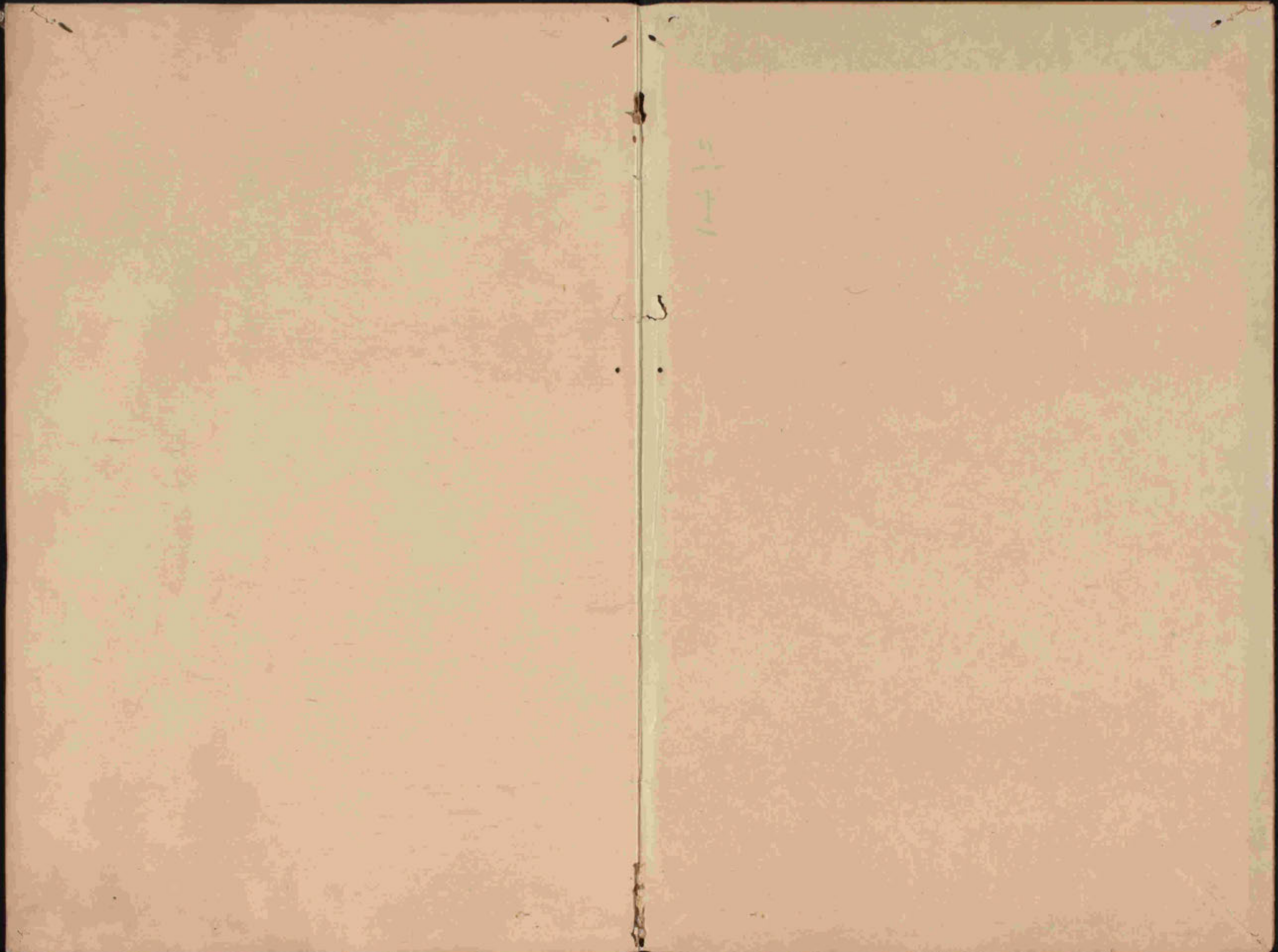


續松遺和歌集



141



續拾遺和歌集卷之第一

春歌上

春をいふをよみかへる

前大納言為家

あまの年の一更をいふにゆくふよ春をいふに新

ふ又百番言合よ 後京極持政前太政大臣

とくあけけい新のあ場や屋内よりこも春をいふ

久母六年上宗徳院より百首言合よけり春の

初れ言 皇太后宮大夫後成

春をいふをよみかへる朝日の言は又や合

歌

長二位家隆

天の原りかみくくわあまの年一春のいふをいふ

建保四年後鳥羽院より百首言合よけり

参議雅純

久このあまきる雪のふとくもく新とわす春いふをい

初春のいふ

正三位家

み雪もろ屋上の新とわすくもく山鳥いふをいふ

寶治元年十言合よ早春霞

万里小路右大臣

今も初雪いふをいふ朝霞いふをいふに春いふをい

歌しぬみ

順徳院抄歌

降川もろ松のつれ葉の泣け我い雪ふとをうさ岩のよき

後二位家隆

ま〜〜のこのの栞を〜〜と新ぬみ我る考のま〜雪

〜〜と百三三のあ〜我〜にわ〜〜

太上天皇

かあ先も何〜考凡い〜〜して花結りか〜ぬ我る漢雪

藤白丸太 肺

をの面にい〜〜も〜〜か〜に流〜〜よの〜〜考は漢雪

御雪のふを

藤白丸太 一条

考の我〜〜代凡い〜〜ふ〜〜け〜〜ぬ〜〜白雪

建長六年三三三の今〜〜雪

院女おゆ

白雪い〜〜ぬ〜〜と雪の鳴〜〜に考〜〜あ〜〜

あ〜百番三の今〜 源具親朝長

考凡〜梅の〜〜た〜〜〜〜〜〜ぬ〜〜雪の〜〜

侍子に〜〜雪の梅に雪書〜〜所を漢け〜

狩人細言長家

梅〜〜に鳴〜〜〜ぬ〜〜と〜〜ぬ〜〜ぬ〜〜ぬ〜〜ぬ〜

後〜お〜ぬ〜〜け〜〜ぬ〜〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜

くさくさなこころはこころにけしきにまじりて

とと又身

折くこころ花をわらわ我梅之にゆきまうふ春は後雪
歌 月を

前入納言良教

咲きけり垣の梅はまみりてかり後雪に春凡う多く
建保四年百三十三うけりけり

西園寺入道前右大臣

春風や信ふ心は梅の花さうふ枝は雪はるわつ

歌 一 一 一

西行法師

くさくさ思ひもようく雪のふつはこころのまじり

千五百番三つ合日

前中納言定家

消えくは又こころをうらむ心は野は後雪う降
あるをよふとねん 後鳥羽院少輔

白妙の神をそゆふまにこころに野の春は後雪

寛治二年後嵯峨院は百三十三うけりけり

澤若菜を

前内大臣 基

ろとるる野の澤のわらわ春や昔にわらわに

歌 一 一 一

よみ人 一 一 一

今より春は成りわらわをうらむ心は野の春は

野外産

古所門地止製

春乃きつらからみのにまらぬ^{いさ}しほくも車おじうの京

建保二年の裏詩言を合^あおまはけける^た付印

今を
前中納言定家

まをり^ま飛火^{とび}の野^のさのれ^さ入^い家^け。ゆし^ゆる^る春^はの^の切^きの^の切^きの

河内栲飯家百首言よ家

西園寺入道前左大臣

秋^あの^の夜^よも^もい^いく^くに^にほ^ほき^きわ^わら^らの^のら^らの^の春^はの^のあ^あを^をり^りの

三位行純

梓弓^あ矢野^やの^の秋^あの^の書^しり^りけ^けく^く新^あの^のう^うさ^さの^のる^る月^づけ^けを

又永四年の裏詩言を合^あおまはけける^た付印
又永四年の裏詩言を合^あおまはけける^た付印
又永四年の裏詩言を合^あおまはけける^た付印

ちよ
前大納言考成

ちよ^ちの^のる^るや^やし^しう^うこ^こみ^みわ^わら^らの^の新^あの^のう^うさ^さの^のる^る月^づけ^けを

春言の中
右兵衛督基成

雪^ゆの^のら^らの^のし^しの^のう^うさ^さの^のる^る月^づけ^けを

前大納言考成

さ^さの^の娘^{むすめ}の^のら^らの^のし^しの^のう^うさ^さの^のる^る月^づけ^けを

又永二年七月白河よりくく^くの^のう^うさ^さの^のる^る月^づけ^けを

七百首言のう^うさ^さの^のる^る月^づけ^けを

山階入道左大臣

水^みの^のう^うさ^さの^のら^らの^のし^しの^のう^うさ^さの^のる^る月^づけ^けを

名取百首言ちりけり

僧正行意

伊勢の海らるるにうき浪ほより天の系をらわよの舟
をこの浦にゆりあそびみかへり

道周法師

ゆり浦の凡そけしけし考の日は氣う浪もきつとけり

海邊氣こまを 源俊賴詞

春氣ゆらむ浦みりかに磯に浪波の音のこす

藤原隆信詞

よりの浦の氣られゆく後ゆより梢うみゆる松のし

く

藤原為世詞

えりくかみ波に埋れく磯もねのこるう凡

中務宗尊親

浦に浪こちりめの考ゆらるるに入りかめらわら鳴

弘長元年百首言ちりけり

常盤井入道兼光詞

みうゆに波路らるるに浪もくかみかみきく浦の初鳴

建永二年詠言を言ひ我かへり江と春を

院并白

漕うらめりくを舟か舟ゆり入江よりあじもあ

夾路柳花のしりしと

兼用は左大夫 一系

枝より分柳のしりしとにわしりして緑のしりしは春のしりし
建保四年の裏百番の言日

西園寺入道兼左大夫

青柳の系を分つたよりのまをわりのしりしを深う

西中柳のしりしを 鎌入左大夫

青柳の系よりしりしを分つたよりのまをわりのしりしを深う

西中柳のしりしを 鎌入左大夫

梅花のしりしを分つたよりのまをわりのしりしを深う

建永六年の言日梅

後醍醐天皇御製

神より分つたよりのまをわりのしりしを深う

春言の中に 兼大納言隆季

朝露梅のしりしを分つたよりのまをわりのしりしを深う

兼大納言隆季

西園寺入道左大夫

梅のしりしを分つたよりのまをわりのしりしを深う

建永六年の言日梅

兼中納言資平

梅花より小わさうお孝凡々四八人さうかゝる人成る

歌一々

藤壁門院北女

模の戸をわさくさうさ模りに孝の福を同人とさ
里にせさう人のさうさゆりまれ模のむおて
にうりすして 月花門院

くさきをさうさ命と思ふは花の心をさすさう
故マ梅さうさをよきゆけ

鎌倉右大臣

清いさじうささうさの朝の梅と孝を徳地
徳ゆりさうさと 長京信實切夫

わけくみわゆる玉章をいさうさゆりさうさ
光明孝も入道前松政家言合入彦中均厚

河内松政左大臣

泣くさ家にゆり厚大の今いく日わさうさ
百首言さ付 入道二親と性助
さうさ家つさゆりさうささうさ思孝の丁全

入道親とさ使

孝而にじささか我くゆり厚の言は泣くさ言れ
るは花さうさを 梅家使さ通

くさきあさうさにわさう梅よのまはれは笑さうさ

花の可中

藤原清輔納札

そしめ子の神多うとそとそみ我は花の袂にうらみのまを
吟泉を致人たわしの花ささありしゆの先て後
そしに我すはけきじにうけけ

花の可中

契にわらわけしとの花にうらみのまを
弘治元年百三十四年けりける花

藤原納言為家

白雪の文にむしりてそとそみ我は花の袂にうらみのまを
花の可中

順正清輔納札

梅花ささそみ我は花の袂にうらみのまを

建保四年百三十四年けりける花

衆議雅經

そとそみ我は花の袂にうらみのまを
道助は親王の家よ又そとそみ我は花の袂にうらみのまを

西園寺入道藤原為家

そとそみ我は花の袂にうらみのまを
建保三年又百三十四年けりける花

後久我を致人

山姫の産の袖にうらみのまを

花書の中に

前の人を喜

中略より花書の中へいへる日の花とていへる花の文は

雅成親と

紅乃う花とて花のふくく夕日といふもいへる花

光明寺より入道前持殿とて

梅むかひみやまきとていへる夕書の中へ

暮山春とていへる

中略より宗尊祝と

花の書いへることとていへる花の文とていへる花の文

と階入道とていへる花の文とていへる花の文

花の文とていへる花の文

前の人を喜

と乃のいへる花の文とていへる花の文

文永四年の裏書とていへる花の文

前の人を喜

花の文とていへる花の文

前の人を喜

藤原隆祐と

花の文とていへる花の文

人納言通方とていへる花の文

らとちりいづく月雨のそと人煙夕の花みはゆる
けつを同め^{ユキ}〜くにけつはけり

土御門院御製

ぬじりし梢よりけりふかき花を月にみまし

歌〜

京極前用白家肥後

春のくは梅もや〜月の花を花はゆ〜くわ子みか

後鳥羽院御製

疑〜〜〜里の花に〜〜〜

東の月

續拾遺和詩集卷第二

春哥下

歌〜

后二位家隆

春く秋は〜〜〜と青柳のか〜〜〜錦やけり

よ夏百番言合に

皇太后夏大夫後成

白州にゆ〜〜〜梅さ〜〜〜あまのか〜

も是は親王家よ〜〜〜後休けり

や〜野の花の〜〜〜入る〜〜〜家の白毛

花言の中よ

藤原隆祐朝臣

し梅も〜〜〜けりなすの衣は花邊の〜

山階入道左大臣家のすまひのよき御成花

権中納言守

みろ神よりいふまじけなき御成花をまて向ふ春の朝露

文永二年七月白河令よりくくをささるる

七百三十一のうむりさける御成花留入りまを

後京兆後朝夫

木の上よりまきくは日影のいりまの古く人花を恨ん

歌しうか

後醍醐天皇御製

吹風のうらむいそまてくはあはれ花のうら

平忠盛朝夫

いにくも春はすみりそかみけらるるをささるる花は恨ん

平春時朝夫

ほのくも切けらるるおれよりあはれ花のうら

文治元年十月三十一日

皇太后左大臣後成女

春は又花の都さるるあはれをうらみは向ふみり野のう

らも三年の裏百三十一のうらみし時

前大納言為氏

吉野のうらみよの春の名のあはれはあはれ花を重にゆへ

百三十一のうらみし時

権大納言経仁

今も又昔もつねの春にわいしく物思ひなく世をみるか
ゆより八重櫓をみこれけりようつとくせり多

前大納言賢任子

九重ここのへのゆちりる春のつゝ櫓をみかまほしく老うらふ

前中納言定家ちやうけのつゝやう八重櫓より老くつゝ

りけり
老明孝子入道前持良大夫

いぬつゝみろくもあつて櫓を看りて春やよそよそあや

見花日記こいらんを

中務々具平親と

春は花あぬ人あつて花あぬ人のつゝみくそくそく

歌しり

後鳥羽院ちの御歌

昔は花あぬ後のつゝみくそく願の都は花を極えん

前内大臣き喜

ちぬぬあぬのころつゝ切くもぬ人も悲あしく白く春を

院并内侍

を乃にのつゝのつゝころ白まね志りてみゆらふとく

西行法師

年をへく終もわいしく櫓花よりをにりるあを

平重村朝光

さう波つあつゝの櫓をみよはちぬぬあぬのつゝ

道助は親と家。又十三年又山花

春議雅行

あつたふらふらあすこも梅花つたふらふらあすこも
百首うもあすこも 後京為世朝を

凡つたふらふらあすこも梅花つたふらふらあすこも
建保四年の裏百首あすこも

后二位家隆

あつたふらふらあすこも梅花つたふらふらあすこも
又永四年の裏百首あすこも春日あすこも

后二位行家

あつたふらふらあすこも梅花つたふらふらあすこも
建保六年の裏百首あすこも梅

前中納言雅言

あつたふらふらあすこも梅花つたふらふらあすこも
花のうの中よ 后二位家隆

あつたふらふらあすこも梅花つたふらふらあすこも
言ふ花のうの中よ 后二位成實

あつたふらふらあすこも梅花つたふらふらあすこも
歌のうの中よ 春議雅行

あつたふらふらあすこも梅花つたふらふらあすこも
廣めに春のうの中よ 春議雅行

誰か（？）わくわく我なり山路を我をいよそは花のあは
を落花といふをよめとみけり

春と夏自

今（？）あはれ花の盛ふ我情もを（？）ゆりひは

練（？）ふる所は花みよゆりよして後休けり

入道の人を 源道成人納言の方界

ふらふらとちを（？）何うけみ（？）甲柄より（？）すきりけ

中務マ宗尊親と家の百三三

藤原公家増教の

ゆより（？）花こ（？）み（？）す（？）極花のころ（？）をの（？）雪

百三三のし 春宮大実實兼

尋（？）き（？）春（？）より（？）後の（？）わ（？）し（？）と（？）小（？）ま（？）の（？）都（？）の花（？）は（？）ち（？）り（？）

寛治二年百三三のしをけり落花

皇女后夫人実後女

ふ（？）と（？）し（？）と（？）し（？）雪（？）こ（？）ろ（？）の（？）花（？）を（？）花（？）こ（？）り（？）み（？）

弘治三年の裏百三三のしをけり落花

松中納言経平

ふ（？）人（？）乃（？）何（？）れ（？）わ（？）成（？）を（？）の（？）面（？）は（？）わ（？）し（？）井（？）心（？）は（？）て（？）あ（？）極（？）小

堀川池と時鳥好く（？）池と花といふ人

ち（？）れ（？）け（？）り（？） 人納言俊明

うらよよの流よあふ花みれいりぬれは雷ういれ
建保二年流奇名又何と花

順徳院抄歌

よ一野け雷けの火如春の多よさうふれを花と下凡

春言の中よ 辰二位行家

吉野川流のうへるうさうさうさうさうの流のたごちるこじ

百言のあし付 休辰雅有

いづくの春如梅やみなのけふれてふらこあけりるる

建保四年の裏百言^番言合よ

常盤井入道藤太政大臣

白洲け花のみなみのきくそよ考あつらうさうの白波

後久我太政大臣

ふけよ春ゆへにけいよしやい何よごめぬむの志^り

歌 辰二位行家 後鳥羽院抄歌

あ花よちの志ゆへにさうさうさうさうの何

辰二位行家

是川のさかかく我よちる花さうさうさうさうさうさうさう

入道二お親と通助

吹凡がさうさうさうさうさうさうのたのゆへをりてさうさ

後醍醐天皇御時

ふらふらとまゝに女思ひのつゝさくまゝを後よるに

元年の体

咲ゆふ花のわさ名はありて重ににゆゑ也春のよき時
京極入道藤原白字治平く藤原藤原のつゝ
しそよよとゆけり。

肥後

さくく寸草うつゝさくさくはた物すまのこゝと
花の花脚えとゆけり此こゝは西のりて
尋花のつゝさくさく淡ゆけり

前大納言云に

みちのりかいたる花を尋ね花は社を春をすくふゆ

百三のよとゆけり中

順徳院日記

雪こゝろのしと追いついてきて青紫う花のさくさく
弘長三年の裏百三のよとゆけり時春月を

前大納言云に

ま乃よの藤のゆよのよとゆけり
文永二年七月白河よりくくをこゝと
て七百肯のつゝゆけりゆけりゆけり

月

後醍醐院日記

前大納言為家

ちれかに波のよきころ走りてわたりて凡の款をのむ

藤

傳の花ごうみゆらね山の栢をさくくくおるらなみ

貞治二年百首ありけりかたよねと友

後醍醐天皇御製

ゆの緑久もからくねねしは友の志るやんれ

ちれ門内小亭相

いづりてさよめねの月枝より我ら友の花よ咲く

ちれ門内大納言の友は雨中美花

前中納言定家

ちれに信神思くそくつ友の花春いづくかのふにさく

貞治二年百首ありけりかたよねと友

前大納言 甚

皇つと家月夕はゆく春を我らわつれに逢おし

月を

前中納言定家

いれれもく書あつてを別ゆりて

かつら春のふ

續拾遺和詩集卷第三

夏平

貞治二年百首言りけらにがくよ首夏のこと

後醍醐天皇御製

あゝ玉乃うさかうりけり我に信立しかなら夜夜か

山階入道左大臣

くふこつて人交人の白あまのさゆくまつこら蟬のねむ

夏極まじりきこく人のせしむにけり

赤原保門

ふく我人のこゝろを極むまゝのこゝろを我のみを

衣笠内大臣

郭のこゝろをこゝろのこゝろをこゝろのこゝろを

後醍醐天皇

我のこゝろをこゝろのこゝろをこゝろのこゝろを

平政村切

子親おののこゝろをこゝろのこゝろをこゝろのこゝろを

赤大納言考家

引こゝろをこゝろのこゝろをこゝろのこゝろを

後醍醐天皇

源兼氏朝

有次の月にうめのはりしきりしは、いかにうめのはりしきりしは、いかに

ゆいんを

中務卿宗三の親日

終らむとて、いよひも切也^{あひ}ゆきぬ^{あひ}に、我もさよむをを

右と大将通基

尋^{うらふ}ま^ひあ^ひく^ひく^ひふ^ひと^ひ路^{みち}と^{みち}言^{こと}に^{こと}ふ^ふと^ふ人^{ひと}に^{ひと}け^けの^の行^ゆく^くは

右無休皆基氏

い^いぬ^ぬの^のあ^あら^らし^しき^きに^に孰^{たしか}ら^らほ^ほし^しき^きり^りぬ^ぬ初^{はつ}言^{こと}を^を

右大食とゆける付家と百と云^{時歌}後休けるは杜

鶴を

後休けり入道前用白を改め

若^わし^しは^は後^{のち}の^のほ^ほる^るわ^わら^らし^しき^きり^りぬ^ぬ初^{はつ}言^{こと}を^を

友三の申す

大納言純信

西^{にし}き^きく^く人^{ひと}と^とあ^あら^らし^しき^きり^りぬ^ぬ初^{はつ}言^{こと}を^を

和泉式部

ま^まさ^さら^らし^しき^きり^りぬ^ぬ初^{はつ}言^{こと}を^を

後二位家隆

白^{しろ}妙^{たへ}の^のこ^こら^らし^しき^きり^りぬ^ぬ初^{はつ}言^{こと}を^を

光俊朝也

と^とら^らし^しき^きり^りぬ^ぬ初^{はつ}言^{こと}を^を

信實朝也

し^しら^らし^しき^きり^りぬ^ぬ初^{はつ}言^{こと}を^を

同郭よりいふ事を 後京隆博朝夫

一と乃わのな名おをいしきつるあまをいしきつる

遠因付島ねむよりいふ事を

源通濟

もろのちなるう一愛に郭ねむる人の心をまよへりいふ

いしきつる

醍醐入道前をいふ事

いしきつる一愛に受けしきつるれいしきつる

後鳥羽院の御書

時鳥雲のいしきつるいしきつるいしきつる

又治六年女御入りの屏風也

後京隆博朝夫

思ひし我有羽この郭よりいしきつる

後法性寺入道前用白右大臣いしきつる

百三の淡衣けりし郭也

後惠法師

いしきつるいしきつるいしきつる

又三の申也

疾起法師

いしきつるいしきつるいしきつる

辰三位朝政

いしきつるいしきつるいしきつる

卯月のしつしつとありつこは國よほりわくよまは
ける
能因法師

み月ゆりあまの海のけしきとあわまのこころまいたとど
喜彌を讀みける
前中納言雅具

わやち草一丈半のゆきこにひきひたせわ夏の時
百背うめこれしにがくよ
太上天皇

わや先草いじのあ月よりうめもこのゆりの社を
正治二年後鳥羽院より百三うめをける
前中納言隆房

かよはし娘をくふよあかいついあつらふ田よこあつらふ

建保三年又さう合よ夕早苗

前中納言定家

あつらふのうらわらち代の娘をきこらつらふよあつらふ
百三うめあつらふ
前中納言 帥

梅のつらふし道にじつしつとあつらふのころ世にあつらふ
正治元年十さう合よあつらふ
太上天皇

太上天皇

橋のよりあつらふのけしきとあつらふのころあつらふ

如願法師

如願法師

書くは一ののちなるなりと思はくは物類なり

藤原白丸人本 一糸

引くはすちりせくを思ひ出らざるの如く又月をとる

松信の實伴

みくことい度一程のよふか一ちみれく我の又月を乃ら

百首より一付 春官人実實兼

時てわたりんさうくくつよまてかこらる又月をのち

凡も元年百首より一付又月を

衣笠の人本

世れくむすむし社なけ我交りあのわりの里は又月の下

河津抄叙家百首より一付人本

藤原細言為家

みけけのち我むるもかみらる浦の邊はさうく我のち

歌一ありす 藤原忠實朝来

名のうくは波ゆく回ゆやまけけの又月をのち

百首より一付 休辰雅有

又月をいりけの日は水ちて流ゆはさうく二一の枝

藤原道中將實感家言今に又月西

皇々后宮人実後成

又月をいりけの日は水ちて流ゆはさうく二一の枝

携けとらんとけりけり

後境山我比所製

夕カサ周カサのまよと白波あつとにけみをとつらり携へし海

同又月朔ツツク日ツツクころよ後休けり

権大納言の實

又カサふ初カサわしう思カサふ暮る月一と月一から我を

百背カサうろこ我カサにけり

太上天皇

あに海カサのまよわらぬのふカサよよあわらと抱カサうまのよカサ月カサ

按察使の言

がカサーカサたわカサふカサと有カサらるカサ月カサは水カサ又カサ影カサみらカサ夏カサの月カサ

依月夏涼こころを

修理大夫の言

ふカサ心カサは涼カサみけカサま交カサのカサ月カサの極カサにカサ凡カサやカサん

大納言通方カサんカサくカサめカサめカサ八カサ情カサ官カサくカサ言カサ合カサし

休けりよ夏涼月 源有長朝太

まカサゆカサつカサふカサにカサのカサ海カサもカサ初カサとカサ衣カサよカサうカサまカサのカサ月カサ氣カサ

夏涼百カサそカサうカサちカサけカサりカサ時カサ夏カサ月カサ

涼壁門院但馬

ふカサたるカサかカサわカサつカサのカサ凡カサとカサ社カサ周カサとカサ月カサのカサ氣カサ涼カサと

堂火乱飛煙已道こいつらんを

土前門砲水製

小藤京志の「乱飛くうふ」今いくよしの娘を結ん
交治百そうちりけの付夕之

前口大長巻

あつら鳩夕之すれ一後吉の浦のじうひよう取付を

甲らんを

寐蓮法師

谷河のふりれをみくも志く我らとそこ吉守は夕之の之

前用白丸大長 一糸

くくくもろ秘こうわけれあまそこのよそに成り夕之の之

後鳥羽院出製

夕之の情^{ふゆ}の事^{こと}の丈^{つか}同^{どう}より入^い日^ひ浄^{じやう}くそ^そな^なと^とま^まを^を

百そうをもち付

式乾門院出運

白^{しろ}乃^の名^な所^{しよ}のな^なう^うを^をこ^こゆ^ゆま^まは^は斗^とれ^れを^をの^の夏^{なつ}草^{くさ}

交^ま言^{ごん}の中^{なか}に

前在兵衛捨考教

あ^あや^やう^うこ^こを^をの^のあ^あら^らは^は凡^{たゞ}々^{たゞ}名^な所^{しよ}浄^{じやう}くそ^そ夕^ゆ之^しの^の之^し

参議雅行

落^おゆ^ゆふ^ふり^り新^{あたら}よ^しか^かひ^ひく^くは^はち^ちの^のを^を乃^のに^にて^て後^あ友^{とも}の^の夕^ゆ凡^{たゞ}

凡^{たゞ}三^{さん}年^{ねん}の^の裏^{うら}百^{ひゃく}そ^そう^うち^ちあり^り付^つ杜^つ蟬^{せみ}

前大納言考氏

おとろくろの羽は鳴くくか蝉のくか夕日くかよ衣よの杜

建仁元年又十三年ウチウケケル

前大僧正慈鎮

夕よ我ハ野中の松の下よきし故凡さうふりくくしの夢

納涼のくを 順徳院片製

夏ゆりく板舟の氷如志留くく故凡さくわ鳴うるま

建保四年に裏百番ウチウケ

前中納言山く家

夏もくく板舟もちりくく何凡よ志波ぬくかから志如

同年百番ウチウケケル

西園寺入道前々政人

みろくすくくあくくくあくくくく月如え。

くくこれね故凡を吹

續拾遺和語集卷之第四

娘哥と

んぐよ百背うみさ我にけがくよ

とと天皇

けつらら娘に凡の音ねとてくよ同さまのりもよう志

初娘の心を

光明寺も入道兼持政尼下

今朝は雨草の葉の玉に授うひく空吹ひかぬ娘の福

空海百三三うちりけり舟早娘

今寧位師考行

蟬の肌乃指さよふかき交衣かきかぬ娘の来はり

道助は親王家又十三三うちりも

後三位行能

凡の音にけりらるる娘いきほりわさちかのみつ藤原

とと

後鳥羽院中書

うつと夜のうらみと信まて神よしから娘の福凡

光明寺も入道兼持政家娘三十三三の中

池女おゆい

若ぬくのそしとるはの國のこや吹初ら娘は福凡

初娘の心をよりとらりけり

後嵯峨院中書

うきうきに心を怠る松陰の忌丹の伏見の娘の事
寛治元年十月十日の事と云ふは初娘也

右近大将通忠

母の(い)い(い)もわぬ松凡の事(い)心(い)に(い)娘(い)の(い)事(い)
弘治元年百三十九の事なりける母早娘

麻呂大夫基

い(い)ち(い)り(い)野(い)の(い)松(い)の(い)言(い)ゆ(い)く(い)も(い)昔(い)の(い)事(い)の(い)は(い)娘(い)の(い)事(い)に(い)凡(い)

娘(い)の(い)中(い)に(い)

麻呂大夫隆弁

い(い)り(い)し(い)凡(い)の(い)事(い)や(い)天(い)何(い)の(い)事(い)は(い)娘(い)の(い)事(い)に(い)凡(い)
弘治元年(い)の(い)事(い)百(い)三(い)十(い)九(い)の(い)事(い)に(い)付(い)七(い)月(い)也(い)

松中總奉行

織(い)女(い)の(い)事(い)の(い)事(い)の(い)事(い)は(い)娘(い)の(い)事(い)に(い)凡(い)
七月七日(い)の(い)事(い)に(い)付(い)七(い)月(い)也(い)

堀河院中官と総

娘(い)の(い)事(い)の(い)事(い)の(い)事(い)は(い)娘(い)の(い)事(い)に(い)凡(い)

七(い)月(い)の(い)事(い)

松人納言實家

わ(い)さ(い)う(い)の(い)事(い)の(い)事(い)の(い)事(い)は(い)娘(い)の(い)事(い)に(い)凡(い)
修理大夫隆康

年(い)に(い)は(い)る(い)に(い)あ(い)ら(い)ず(い)て(い)天(い)川(い)の(い)事(い)に(い)あ(い)ら(い)ず(い)て(い)後(い)の(い)事(い)に(い)
百(い)三(い)十(い)九(い)の(い)事(い)に(い)付(い)七(い)月(い)也(い)

皇々后文太夫後成世

史のゆゑ我力司にの娘は日家からふるまの志乃系

娘等の中より

前用白左太夫

春日

夕暮はつゝ力司にの娘よりわね物也の如く袖ふ

隆實は親王

ふりかゝるゝ物を思ふトわつゝさになつて娘はうゝ

連懐百三三の中に

皇々后文太夫後成

夏より雨荒れぬらぬらあつたさけつ物に我う世

歌

七是法師

かゝ衣すそ路は申ふ夏より雨き荒れぬらにがう

よみ

いにしへをよき如島花娘凡吹いまはむむら

行路落こころを

藤原隆祐朝夫

袖のうきさく入かふすここのころお花は娘凡う

建保四年百番等の合

順徳院御製

夕暮のゆゑこの娘はむ落をらうゝるゝね袖うゝみ

娘等の中より

后二位家隆

娘のすそその落うらむいさく飛け凡は鶴あぐな

建長二年八月十八日長島御久哥合日野草

花

麻呂大臣 師

花のたゞのよのよの鶴かぐいし花の路への花は夕ぐ花

花家こいひしを 花中納言も

うらわにんをうらわ花しは花とわこけら花の夕花

歌ししを 土佐門院少輔

花のらふうけら花の花は夕花とわこけら花の夕花

花移をこいひしを

後京花永朝夫

うらわにんをうらわ花しは花とわこけら花の夕花

花をこいひしを

太上天皇

花移の夕花とわこけら花の夕花

花家こいひしを 花中納言も

うらわにんをうらわ花しは花とわこけら花の夕花

入道二品親王家よ夕花とわこけら花の夕花

春宮大史實兼

うらわにんをうらわ花しは花とわこけら花の夕花

花家こいひしを 花中納言も

うらわにんをうらわ花しは花とわこけら花の夕花

花家の中よ 花中納言も

是月の凡そしき月乳よく更也して麻のさく

歌一々

後鳥羽院御製

久のりらと娘よまかく麻のさくもくさき等の朝身

承暦二年の裏言宮日麻

権大納言の實

身もくさきのみのへにむけ麻のおまにむかひてを

初唐と

藤原為頼朝夫

故身はえ日鳴る初唐のあまし春や思ひいけ

弘長元年百三十一日

前大納言為氏

今より乃衣がとうの娘はよむつおとしし鳴てま

秋尋の中に

實には親と

いゆらと雲のあ唐もあそく娘はよむつおとしし

暮天因雁こしつるを

とと天鳥

をさうらあつらわして夕言の重れいけし唐の鳴

歌一々

藤原門院御製

夕言の身はえとく唐の鳴る娘はよむつおとしし

信實朝夫

唐の鳴る夕言のあ唐の京田をさしと娘はよむ

百三十一番一付

信濃公實行

材るれ申のうへに居鳴く夕日橋の山を臨

歌一々

晋光園入道前白丸大夫

みらことよのふらうの。舞鳴く夕日よじり松の打

堀河右大夫

こつふ夕舞うきこ枝のこねここのころ娘の山本

百三十一番一付

藤原為世朝夫

上のみ乃よと雪ふりきこめしあきとしるれおきよの娘

娘哥の中に

常盤井入道前左大臣

ちみ山禁の弟の娘はよりちるにみゆらうらの川波

弘治元年百三十一番一付

前大納言為家

朝りしをあらぬのよき清て禁をくころ娘のけ弟

歌一々

中務卿山宗三親と

船よあうをらくこの袖みで夕舞うあき娘のけ娘

百三十一番一付

前中納言定家

かのこ我すじこり弟をあらぬの里に娘は了吹

文永二年八月十八日未出月

本乾門院右衛門

待りのせはみんをいりてしや信おあわぬ娘のよの月

娘哥の中

正二位左大臣

かこころの神の娘凡そ更へにむくくのふゆき月

建長二年八月十八日又和鳥羽より哥有る月

凡

此よりゆけ

ふゆきをせくまけし月は松をうへて娘凡そ

歌一々

後鳥羽作

天の原を吹らる娘凡そゆきのふゆき月を

中納言教良

此より雪吹らる娘凡そゆきのふゆき月

九月十八日又和鳥羽より

春宮大史實兼

是等のふゆき月をすみそにゆき月氣

歌一々

平時村

村中よりふゆき月をゆきのふゆき月氣

娘のゆき輪をゆきのふゆき月氣

前中納言實實

娘のゆき輪をゆきのふゆき月氣

娘依月勝をゆきのふゆき月氣

後鳥羽作

つるぎのふゆき月をゆきのふゆき月氣

延享三年九月十三日水十時三十分今日名所月

冷泉を改大木

年とくきうしうくまのけりるしひふこの故わの月

月言の中は 中務宗之親日

ようゆく何のりくしひつひ月よりお思寄の白せ

又此二年八月十二日庚子今日停午月

に二位好家

今この板わの氷のうへゆきたのころくゆなく月廿日

くくくくく 右大木

昔よりと名よみ人の故のまして月いこいしうすはゆき

約通で

後醍醐天皇御製

年とくく雲のうみくみ人の故のまをきくふ月日の駒

心三位好家

夕言の月よりとまに用ちてまの下くきくきくくこの駒

前用白一冬家百三言に用月

前大納言考家

相坂や島のくわの用の戸とををきくやですりる月歌

用路月といつらんを 左京大夫好家

逢坂の用の清水のなりわをいりくく月の歌を

いりり

續拾遺和詩集卷第八

娘哥下

歌一 ぬか

信實朝夫

月影と夜さしに成ぬり娘の衣でうききうらの何そ

太宰府奉行

楊娘おろしと袖とよやさしに月よさくかうらの川波

へく歌とこくちとくうにうほにうらにわて

日月前眺らとこくちとくをよみとぬきけら

太と天自

片ふらとちる月影さして何そ音の弟ううとて流る

文永五年九月十三日夜白河夕又その言をよ

け水澄月

麻大納言為氏

新やう月乃かじとて到しにまえよのすう娘の川

歌一 ぬか

体短能清

あにちち紅糸をよおし三田川月よ水の娘よかあ

文永五年八月十一日夜由裏言をよ何月似

歌

典体親子朝夫

三田け若く寸浪のこりらと何そとるこ名お月よ高

月言の中よ

麻大僧正慈徳

てら月の走らとたにあり歌よ音とすあらし川の水

建保二年故ナキニウケケル

後之我を改大也

るりる滝にきぬの故也月十ころこ鳥我氣せしゆ

よ又百番言をよ 野宮左大臣

きこしひらきんの水とすじ月つひ歩くころあは

くくく 平政村朝来

みるのちくわらにはのきよとく家のむくりあ月う

惟宗忠宗

東舟こくゆ良のみちの改凡は印し海を故の月乳

平清時

思ひやう浦のくし鳩あやしくいよこつみやう故也月

又永七年八月十五夜は裏こそころよ海月こ

くくく 右衛門督實冬

う鳩くあくくころ月の乳こて磯守復は故凡う吹

らも三年月百首言をよ 村浦月

前大納言為氏

す留の浦く南のたけく浪を月よ吹く子故の改凡

光切幸手も入道前持の家。八月十五夜言をよ

名所月 後堀河院民と典也

清みく月のやよきこくわすいゆくくく海波

月々の中々

登蓮法師

清み^える月^えあじよりの村をい^ちのきお^らぬ^らつと^やか^り
弘治元年百三^十三^年あけけ^る月^で

衣^は三^内大夫

よ^うさ^じち^りる^せ田^のま^のの^た凡^はこ^られ^ぬ里^も月^やら^らば
文永^五年八月十^五日^夜の^裏言^合は^田家^見月

三^位行^家

い^まち^やあ^のの^たの^た凡^はぶ^わよ^をこ^らし^てし^る月^影
建^治三年九月十^五日^夜十^三の^言合^は田^家月

蘇^ゆ大夫^師

精^心門^田の^名如^月影^はわ^のい^ひを^同く^まり

歌^一あ^りす

五^嘉門^田家^系

凡^の音^と吹^留ち^るや^さら^らし^ては^我い^おす^の如^ちの^月

前^橋次^左大夫

月^みく^くと^梅の^音し^思は^れて^しの^とあ^らみ^さう^つは^我

前^大納^言為^家

娘^をく^くき^さら^らし^てし^る月^影は^思は^れて^し

建^治二年八月十^五日^夜鳥^居友^言に^月前^凡

後^橋次^左大夫

あ^の凡^のた^から^わ我^若し^すみ^おれ^くし^る月^とら^らが

老の後月をみくよまふける

皇太后太后後成

かろしおれお十の娘もみりしをの昔をさへ月いふ月
月の子 月の子
式子日記 式子日記
元年百三三のちりける月

衣は内人未

かろしおれお十の娘もみりしをの昔をさへ月いふ月

家は月又十三三のちりける月

後京極持政前を改大下

かろしおれお十の娘もみりしをの昔をさへ月いふ月

家は月又十三三のちりける月

後久我を改大下

かろしおれお十の娘もみりしをの昔をさへ月いふ月

家は月又十三三のちりける月

丸無馬指信家

かろしおれお十の娘もみりしをの昔をさへ月いふ月

家は月又十三三のちりける月

かろしおれお十の娘もみりしをの昔をさへ月いふ月

如新法師

かろしおれお十の娘もみりしをの昔をさへ月いふ月

家は月又十三三のちりける月

山田の末の弟^音とてふなりしにしる月の

之月^音事入道^音藤原家^音の二十^音事^音の中

之^音後^音朝^音未^音

娘の田^音は^音し^音を^音わ^音く^音し^音り^音吹^音風^音は^音山^音本^音み^音て^音ら^音う^音夕^音弟^音

交^音治^音百^音首^音の^音ち^音り^音け^音り^音の^音娘^音田^音を^音

前^音人^音長^音喜^音

夕^音日^音と^音山^音田^音の^音娘^音の^音つ^音ま^音遊^音ち^音た^音り^音し^音て^音な^音り^音は^音は

山^音階^音入^音道^音た^音た^音家^音の^音十^音事^音の^音日^音田^音家^音娘^音寒^音

前^音人^音納^音言^音為^音氏^音

家^音の^音お^音て^音の^音つ^音ま^音結^音か^音つ^音と^音春^音さ^音じ^音ぶ^音娘^音の^音し^音り^音と

娘^音言^音の中^音に^音 信^音人^音納^音言^音家^音也^音

山^音田^音の^音春^音と^音し^音り^音衣^音て^音い^音春^音も^音衣^音す^音し^音て^音わ^音り

接^音衣^音の^音し^音を^音 順^音徳^音氏^音也^音親^音

う^音し^音の^音し^音わ^音り^音と^音多^音す^音ま^音き^音う^音の^音わ^音衣^音月^音さ^音う^音

後^音京^音極^音接^音衣^音前^音人^音也^音氏^音未^音

ゆ^音り^音と^音あ^音の^音接^音衣^音結^音わ^音ひ^音と^音都^音の^音月^音日^音衣^音し^音り^音る^音り

は^音家^音に^音又^音十^音事^音の^音よ^音と^音け^音り^音也^音

入^音道^音二^音品^音親^音日^音性^音助^音

ま^音り^音あ^音り^音家^音と^音し^音じ^音と^音月^音親^音日^音衣^音く^音い^音く^音衣^音う^音つ^音日^音

歌^音一^音也^音也^音

右^音邊^音中^音持^音行^音家^音

梅雪の中は

前日大花 喜

みーゆのわらわらうらうら梅はよふにさかして鶴鳴うらや

天明奉ち入道前持政家梅三千さきりよ

ほ二位り家

ありあひーたの雪ゆきいよゆきくく下笑り我ゆくをの梅らこ

歌うた——

西行法師

梅はよふしるをのこしあつるのり笑に虫のあふりるや

藪中こしつらんを 太宰権時為行

虫のこしかれくしなるる七月のわらわらまぬるのこし

ゆんた

草の京しり花ゆら月影をよふしよふくはあつる

白河友七百首うらひ水邊草

後醍醐天皇御歌

くみくしうめしととがひとく我もさかすむすこふ事事の下状状

歌うた——

天明奉ち入道前持政家

花裏のそとへの思はほほしくもふすその梅はゆき

建永六年飛山久しく初はつて又さきう梅もさか

花けりよの初紅雲こりしを

思入道前持政家

そく花やうら初はつる梅の上く我もほほしく梅の紅雲

前中納言資平

虎ふくみのついでに紅糸のついでに

娘のついでに読はるる 山階入道左大夫

吹しりらじし凡のわじしつらさし

文礼又年九月十三日白付後み言言は言山

紅糸 後境上義隆宮内

册^まゆく雲のようしりら紅糸も夕日しうしかにし

百首言言し付 後中納言雄

とみらくしよその日乳のしりら紅糸のし

弘長元年百言言しりけり付紅糸を

常盤井入道兼左大夫

夕にらひしうしえの雲同しりえうし

衣笠の大夫

と田妹今や楢のついでにこまつし

田代掾家百言言しりし

後壁門代女

と田山木笑しりけりしりら

後京京徳

はるるしりら田の木の紅糸のしりら

建長二年九月詠言言しりし

九道中将家敷

片吹木葉は音をとまててはるるも打をのう

百肯うめと我はけい

大と天皇

秋五月くもくくもくもく模のをは西留はめく木葉あ

及系考世朝夫

折書のうしててらわくははも葉のうもわくは留は

落葉

中務の宗考親王

しつちのたもててととくもくははのた葉るりな

式乾門地片申

木の葉の風にたつるも紅葉の雪のうも河留あ

辰三位忠兼

立田の娘いりうもあにやも葉あまのまも我らあを

弘治元年百三すうも一何甲一を

前大納言考氏

紅葉の娘あまあの子にむもこのいも木枯のう

くも葉をさくもくもくもくもくもくもくもくもくも

しよは落葉は氷こつらんを

大と天皇

大かひもさしは娘のあにさしんれをわくくもくもくも

名所言をけり

源具親朝来

紅雲乃わりの世より大おけ後世の世をみよ

歌一

土佐門流中製

梅娘の枝へまよひ世をこし少紫なりうららの細衣

後京極持政前左大臣

古乃らうら世をよび世をこし木の葉や世の下に梅を

平政長

み娘の世をよび世をこし花のわらうら世の冬草

前右兵衛持世為教女

冬草と枯野の草の世をこし世の名女と梅の初花

百首言をけり

前大納言賢喜

今より草葉はまよひ白雲とほれら世をこし梅の

惟明親王家の十文をけり

前中納言定家

秋月そよみ世をよび世をこし世の名女と梅の初花

歌一

順徳院中製

みまの娘の世をよび世をこし世の名女と梅の初花

前左大臣定家 一系

うららに梅の世をよび世をこし世の名女と梅の初花

土佐門流中製

人かよわくくか我あ一我宿のあさらりあうじりあ

よみ人〜〜

あゆ〜〜をのあさらりか我あ朝見さじ〜〜のあは里

小休後

あつれのあさらりまじく冬野におむう娘のこみやる

後京極持政前を致人未

娘のま如く〜〜我野に成也我に月のあ〜〜をうらちを我

建保四年の裏百番の合よ

寺如井入道前を致人未

紅葉と〜〜もの〜〜わ我と〜〜月よわ外の娘うの〜〜也

冬月を

権人納言も雅

さあうよとよ〜〜田わ火のこやとけにり〜〜月のあ〜〜と〜〜あ

藤原基経

藤の〜〜乃と〜〜あよめ〜〜月と〜〜あ〜〜りら有明を月

交治百三十四のり〜〜時豊功節會

冷泉を致人未

とあ〜〜のを〜〜ち交て月と〜〜てあわのを〜〜いに〜〜ら人

百首よ〜〜と〜〜け〜〜

後堀上我地持親

〜〜あ〜〜の神白あ〜〜あ〜〜を〜〜也〜〜明〜〜と〜〜や〜〜るを〜〜也〜〜

歌——か

古所門院作歌

ねとじこみりの廣のこよみ鳥さるの表にたやにをつら

夕子鳥さるつらを 京極院内侍

夕子我らさけるめつ鳥さるさるこよ波よみ鳥さるさる

あまのうの中よ 後京極持政前を後人末

てら月の乳にゆきさるこよみ鳥さるさるさるに浦さるさる

権律師の歌

よをさるさる海乃入江よさるこよみ鳥さるさるこりら月よさるさ

後志法師

け凡にさるさるねをさるさるさるさる後ら切也このこを

兼連法師

さるさるのさるさるの鴨のこねねさるさるさるさるさるさる

直後門院丹後

さるさるの表よの袖よさるさるの床にさるさるのさるさる

西園寺入道前を後人末

さるの紅雲のさるさるのさるさるのさるさるのさるさる

よ又百番言合に 前入道言忠良

さるゆをさるの下水をさるさるさるさるさるさるさるさる

歌——か 平宣付

さる浪やさるのさるさるさるさるさるさるさるさるさる

大江頼重

志保より波の志つらみをこき流して一寸物ら山付
河内持政家百首よりよみ

正三位和家

志保より波の志つらみよしや今朝の志のわらわきり
建保四年三月廿一日に付紙

冷泉を政大臣

凡そつらつらのけ波さゆりよたふをうくらとく此細代
志保を後付け

権中納言具房

うらつらとく志保よりよさう枕書をのこせ凡の言らふ

中務卿宗高親と家の百首より

権僧正實休

志保よりこの志つらみの凡そかうの玉おのりて我に
建保四年四月庚申に冬夕といつらんを

参議雅行

わらわらふ正史のかりつらつら日のこよ移る氣うみ
冬首の中に 辰之位を継

切らつら志のこよしとくしよ凡そしと志保より
凡そ元年百首より廿一日に付書

前大納言為氏

さゆらよの嵐の凡にあり初てわくらもゆよにまさる白雪
名可うをけり 前大僧正慈鑑

志質の浦より海をゆきまらるる雪にありけり凡の雪
建保元年の裏言をよきけり

春議雅行

このはらへく我も雪ももろくに衣もをりぬるのけり
百言のうらみとゆきけり

順法師抄

よけの氷とくまき氷の面よじりけりけりこの初言

歌一し

前大僧正慈鑑

けこみかうてををみけりけり我野のよきけり白雪

承久元年の裏言をよきけり

正三位家

娘のまをらるるみけりけり枯のよりの初言をよきけり

雪の朝名門書也暮らつてよきけり

九条大入道

今朝は雪もやういふに我もよきけり

河内掎家百言の雪を

孝聖井入道前を教人

くまらるる雪のわがよきけり

冬雪の中に

冬後朝未

そ乃じのぬきふにうしらの雪をさみみく恨やをのま雪

高野山門院抄

江おしじぬきふにうしらの雪をさみみく恨やをのま雪

藤原教雅朝未

あしは雪をさみみく恨やをのま雪

あしは雪をさみみく恨やをのま雪

大進中持の衡

三上のふよのぬき雪は埋れて下繋る枝のまきうらみけら

雪のまきうらみけら

藤原納言考家

夫田の野のあさち。京に埋れぬくわららのまきうらみけら

道徳法師

いにしへもぬき雪は吹くそはわらきまきうらみの白雪

守覚は親王家又十三年に

寂蓮法師

ふ田の雪をさみみく恨やをのま雪

文永十年七月日裏七まきうらみけら

後京隆持朝未

まきうらみけら

かきぬらの雪の朝一のひくも幸有ける故に
よき侍ける
賀茂氏久

秋山の松もぬしや思ふこころのすゝめぬの女ゆゑに
弘治元年百三十一の雪を

信二位行家

き月のあつぬ雪に泣きぬくもあつぬ人ともく
寛治百三十一の雪を

信二位頼氏

き月のあつぬ雪に泣きぬくもあつぬ人ともく
建保元年の裏雪を

信實朝長

田子のあつぬ雪に泣きぬくもあつぬ人ともく
冬雪の中よ
平政村朝長

伊勢嶋の浦の雪に泣きぬくもあつぬ人ともく
雪中を情こころを

信性も入道前用白を致す

かきぬらの雪に泣きぬくもあつぬ人ともく
白河殿七百三十一の雪

後醍醐天皇御製

かきぬらの雪に泣きぬくもあつぬ人ともく

歌

正親町院右京大夫

あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

朝淡休けり 周防内侍

わさよのま換りて雪のいろもいふ言わたるるよこちありて

交治百三言ちりける侍積雪

池女おゆ

あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

正治百三言ちりける侍積雪 前中納言定家

詠^{うた}あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

中將おゆける侍雪のよ月わつとけりて

より女房あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

前大納言隆房

わつとけりていづるみじわありて

大納言通方八幡宮よりいづるみじわありて

あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

あつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

後鳥羽院はあつ雪にいくの道はまゐりていづるみじわありて

續拾遺和詩集卷第七

雜春奇

弘治元年百首奇なりける竹初春の心を

衣笠の久長

相坂の用の杖じし雪消く道わらば代に春はまじ

抑々

後頼朝也

いりしけこみかも解きをつといへけは春をいりし

春の奇の中に

雅成親也

池よおつら水草のよお春の光有るわね世にわら

蘇大納言朝朝

雪は移るふかりし寸らうくに春まよけ言に言う時

し里にく言のそうく鳴け我は淡休ける

武乾門院右京大夫

うしこめかよふそけりるまを我に信言のあまうほる

し階入道左大夫家のナ言よ子日ね言と

源兼成朝也

岩ひけや子日にしうる老ぬね移りよむ我く言をさしほ

四後の後崇徳院の還界いさるゆるを我さあけ

ころ百首の類しきなりけるいかに

皇今右大臣後成

雲のよりのまじりし路を今更に霧障てまけくまは

を同りし還昇はみれけりしを

冥途百もすりけりかてよ山霧

後漢上野氏抄

今又のまじりし路を今更に霧障てまけくまは

白け後七百もすりけりかてよ山霧

麻大納言為家

ふりよのまじりし路を今更に霧障てまけくまは

建保三年の裏書右日江と霧

二位家隆

ふりよのまじりし路を今更に霧障てまけくまは

平親清女

けりとのまじりし路を今更に霧障てまけくまは

八条院の書

みくも又みれりし路を今更に霧障てまけくまは

世をうしりて外にうしりてみれりし路を今更に霧障てまけくまは

せしけりし所の梅をみく後かへり

兵部平隆親

折るるにみれりし路を今更に霧障てまけくまは

康元二年二月の比にけりし路を今更に霧障てまけくまは

野花

友系仲敏

ゆきこき里まの橋より花よりこころの管をうら

歌——

如月法師

吹せらわを花の匂ひより氣よかりきさく

け息花こころを

源時清

ちぬ月の波も橋よりこころの花のよめよけ志水

春官帯刀よりけけを思ひ出しく

めら

藤原基成

あまのまのこころの花をけけのきうはれ

故郷花こころをよめけける

権女信都殿雅

伊ののわちをれ思古まは花いこころ思ひ出しく

月を

藤原正通玄

みすくわ世のじり思ひ出て衣こころ思ひ出しく

まらよ花みよめけけ

吉部隆親

思ひ出の考こころよめけけ花は泪のよめけ

花の中よ

前田大夫 基

ありあけより花はかきこころあわんこころ

衣笠の大夫

年毎に後の考ももろくろく花よいくさい別てさう

信實朝夫

いけぬての雲わ乃極のうく色折馬我らる光の書りふ

信下朝

四十甲く花よんをうたなり書成さくそとみそを起我

京月法師

かろくく八十の考にわくく花みくこの今下やんり

世をのつれてのら花をみくよえら

真形法師

考きそうくくはくもとく我ある花に別りく墨深の袖

後京極持成家の花又十そり

前大僧正慈鏡

かく神つこき物を月よりと花さう世をい思ひく公我

歌一か

古片門院中親

さくそあ花をもあしと我う女前になくあう世中

花盛に西園寺入道前を政久長の子よりを

に我て休けらぬすす

前中納言山家

人この書にまろ我わあゆふの心極とあつてやう

花をかく後付けり 蓮生法師

あはれはの思ひ人の命もく花をいづくもいかに思ふ
雪林院より花のあけけりをいふ

中京新苑

命をいふていふていふていふていふていふていふていふ

落花をよめる 平長時

うつくしに梅ひでしむもいふまにあをきりていふ

友京京總

あはれはの思ひ人の命もく花をいづくもいかに思ふ

静には親日

花をかく後付けり 蓮生法師

あはれはの思ひ人の命もく花をいづくもいかに思ふ
雪林院より花のあけけりをいふ

源光行

あはれはの思ひ人の命もく花をいづくもいかに思ふ

あ

法眼宗田

あはれはの思ひ人の命もく花をいづくもいかに思ふ

あ

あ

あはれはの思ひ人の命もく花をいづくもいかに思ふ

水鳥落花をいふ

けつ後つるりたる 平春付朝夫

こひくく福言いさうに舟島わたり昔の宿をたふせう

友の言の中より 辰三行住女

さわしてうみそくそく郭らぼつし里とみやうれつ

用白の表もりく後行しつをきつて

兼用白丸人長 齋藤

終る我一人何しのほくく今言わはるそく関りか

歌しつゝか け下る朝

あゝの笑如もよれん交の所もようにあうしつて

百三三のちり付 静には親と

しつ人ともいふ世の郭らういあつとむのおえ

度足郭らごりしを

前入納言考女

しつていふおえうつくさむやむのおえ如月

徳大寺入道前入納言考女

に我もさうちの我いさし冊もわう有明の月も

友言の中より 前右兵衛督考女

あやち草々いさしかきうにいづとね袖も

録余右人長

いふをいさしは古くのわりのあはうらからた

古く門地片製

百あやをのころた思ひまゝ更じりの志のつら

あま橋こまきや 天名府まゝ真乳

楊いゆり袖の巻こわいよもむの仕えう者立り

けふ月雨 友京景上家

浅きまわりの波うつろり野川割まこりく又月面のほ

申持をらまきし年久しくゆよけりよ又月面は

くら人のまじにうりける

休辰雅有

いとま我とるゆりく又月面よまのじみくこのようい

郭をこまき 源親行

又月面の雲わらうのりくす時わ思ひの仕をく時

は眼慶融

舟島みふにうらこまきするあまがくすこりやいほ

家よすまきうまを休けり村友草を

山階入道左大夫

草わらう交野のちまゆいり世の理う文にま

まき 橋春撰

きるの河うすけの夕まにまちる波いりるあまを

あま所よ久しく勢わく後勅修するゆり

淡休ける

人儒正道實

三つとわじり言よまてみれは昔と比す死にけるか

百三の奇事ふたまた付

入道ゆえ

片後すもわきのりあへ流るて流るくちわがしの川

古月後を

麻大納言考家

みうへ何やきとやくまをたてきらあ波の

しんぞう

續拾遺和詩秋集巻第八

雜秋奇

初娘の心を淡休ける

前九兵衛持方

海に舟の心をほそく枕より流るる初さち娘のまゝ

克俊朝長

朝あさに又いへる御まけりて夕の娘のまゝ

藤原季宗朝長

袖乃とにいじりてわのわの草もはなはな

初娘はつむすめのまゝを 儒正聖兼

今より海へ成想つゝ島の志のいふは娘のいかに

是又田舎成

多しにうけりいひゆふいゝきあひくわさ比代娘の初凡

文永十二年七月七日の裏日七言うき時

前大納言為家

天何八十よりいほむの波ゆつらかつとふよわいお

醜駒入道前太政大臣女

つこまりかたのそこまりそよむつるもの神のなれ玉

歌一おきか 静には親

葉のくは春の外さつ月三袖にさけく娘凡うき

弘長元年百首うきりけり時孫と

前大納言 基

萩乃らよ昔いゝは凡とちむいりりるゆりあ

前大納言為家

古い井しるのそ我萩のくに吹くら風を福芝すそ

は萩凡のそまこいつらんを

前大納言 基

娘乃のなより外れそまこにひかひも果也萩のそ凡

弘長元年百首うきりけり時孫

前大納言為家

からすの草の枕は煙は泪なみだすのちろ路みちの

煙かえりの中なかに

前まへ大納言おほののり基良もとよし

思おもひをくさるくさるは家いへにゆく煙かえりのしほくしよしよの命いのちにまらるまらる

常盤とこひら井入いりい道前みちまへを改あらため家いへの十と又またそのうちは

山階やまがし入いり右みぎ大夫おほのぶ

いりし煙かえりの泪なみだのなみだはらうはらうめめ力ちからはううりりの袖そでのそでをを

中務なかつむつ宗むねの親おやと家いへのの言こと合あはは煙かえり夕ゆふ

左ひだり近ちか中なかつ将しょう貞さだ氏うぢ

力ちからはううりりのの家いへのの煙かえりののややとと夕ゆふのの袖そでをを

歌うた一ひと首うた

後のち醍た醐ご親おや正ただ親ちか親おや

そくそく家いへのの父ちちとと母ははののわわたたりりのの男おとこ利とのの里さと原はらのの袖そで

前まへ抄しょう改かへ左ひだり大夫おほのぶ

投なりりのの我われのの煙かえりのの夕ゆふのの袖そでののいいはは

辰たつみ之の位ゐ忠ただ兼かね

いいままくく思おもひひににものものののううららぶぶ今いまままのの月つきのの煙かえりのの夕ゆふのの言こと

平へい親ちか信のぶ女むすめ妹いもうと

何なにゆゆええのの思おもひひをを思おもひひにに袖そでををけけららるる煙かえりのの夕ゆふのの言こと

後のち京きやう景けい徳とく

草くさ葉はののををけけららるる煙かえりのの我われのの袖そでをを思おもひひけけらら

よよううここ人ひと一ひと首うた

夕に花玉おくのしるふらうしははかりちる故縁のしる

源親行

ゆきこれいあうしつわゆるさききくみおのおむ神うなけし

五島門院曰宗

よまよきく雲わのるはむじこまわりの洞をよききつて

藤原人長 基

付水にじしころるはをかくてかきりしあは娘の玉ま

建永三年九月十三日 今より音同局

古市門院小室相

あらしめり身まきく鳴るし鳴れぬしのころいを

卯へんを

夏原隆博朝長

鳴れぬに幸の故身まきくし思ひにさしるる鳴る

海邊霧

中京行實

今又ぬらうし浪うらうしうねりなるは

三井もあま月うよみ休けりよ

浄助法親王

雲とらうみりこのしは娘凡よう波をくいに月乳

田家月ごまを

藤原時明 朝一

高しすのるしを田か名のししは我思月は娘凡う吹

月前述懐こいんを

後長景

乃うこそ月よかくふし娘のよに侍こめくもる目あし

法下禅助

とあへるし月みらよふも力の秘たうこいりあうも同るうし

澄實は親王

乃うこの志我アすらし詔し^{をら}あふいと月の更よけり^か

はもと元年百こり^{よせ}けりけり月を

前大納言為家

乃のうこそはのこいり^いあううこ又めくつとわ月アみ足

娘うの中よ

前用白丸久末 一系

月あはれ志のあうし^いさす^す昔の娘の友こみく^い

建保二年娘ナき^{よせ}けりけり

如教法師

乃あは娘いり^いあう^あこる^こわ^わと月^とから^かあ^あり^り

歌しうか

前大納言為家

か^かの^の皆^みあ^あう^うと^と志^しの^のま^まに^にあ^あう^うこ^この^の娘^{むすめ}の^のよ^よも^も月^{つき}

西行法師

付^つし^した^たか^から^らの^のま^まに^にあ^あう^うこ^この^の娘^{むすめ}の^のよ^よも^も月^{つき}

高弁上人

娘のよもこに^こあ^あう^うこ^この^の娘^{むすめ}の^のよ^よも^も月^{つき}

昔思ふ草に下りて朝はまの露しなりの夜はよの月

松門到曉月徘徊と云ふしを後ら

和氣程成朝夫

松の戸は朝のさきよのうらやみおきてやまらふ夜はよの月

月明ちましく月と云ふしを

藤原白太夫 一系

ふちのくらのうらやみ夜てしかりてみけの夜の月

歌しつゝか

光後朝夫

世をいさなちよゆ人推し我を我いさよとあつて月をみく

は眼源兼

うしつゝはほ世らる我也夜をて月をみく

世をうしつゝて後月をみくよと云ふ

通法法師

月をみくにかもわね夜をうらやみつゝ世の外に我

本心のみまを思ひ出くよみかける

定修法師

月をみくしる里わつと思ひつゝ我に松の夜も月を

月の中よ

は下貫宗

今いふ身にようてよと云ふよと云ふ夜のよも月

信實朝夫

より月をさしえし思ひも私へのつよの娘すききよ
前入信正通玄

月をみちし路の娘は若の袖也れりかへる家の母は
名風百三十一のりけりかへる

順徳院御歌

いぬと書ふくこころ娘の月わらうとえははるやうこ

歌~~~~か 良暹法師

雲のをいさうゆさう娘の月より志ころう娘りを我こ

建保二年娘十き三のちけり

源家也朝也

かふれい十あまの娘は若のつよゆりこころをさし

百首うの中に 前入信正 基

志のつよ娘の社乞のうまきいれつよこころを我り

歌~~~~か よきん~~~~か

あつよの社乞の産のきつよこころは社も社乞のうまき

平忠州

位なりく産の草葉のきつよこころは若のうまき

は下ら朝

きつよこころ鳴をわつかのこころは若のうまき

賞助は親と

有りては又紫の履は夕陽をほふくさくある神の
土師門院止観

柳京一くさきけ我神のついでさうほひるか
百三十一^{ふたむね}付 麻中納言資平

又十わすれむうのより此神三月志く死してみうふと世
あまのうの中又 静には親と

神三月有りて入神の所ありさうとせむうと花の洞に
麻大僧正隆弁

いづこい神あかしくししし所ありてありあむの住定
是又田女香

神あかむいさけい核のついでさうほひるか
定言法師

うさむるさく神あかむを所ありてありあむ
は下ろ朝

母あかむいさけい^{あか}あまうくありてありあむ
松女僧都田勇

神を月くさくを^{あま}あまうくありてありあむ
澄賞は親と

我あかむいさけい^{あま}ありてありあむの松の所ありてあり
平義宗

尚るく書きたしき言そくに西^{とら}るていふかにしるる

入道二お親と高野山よこしり付けりしり

ける

中務^マ宗高親と

いりり高野のかくの志らるし都^い書のらるる

り

入道二お親と性助

とらるし都のせに思ひし我高野の雪の雪うらるる

古も鐘こぶしを

心月法師

高野と書^{あつ}をぬり鐘のをしといくよの我におまらり也

神五月の此書いり我さしけれり書はあふ

人よりのりける

蓮子に親と

高野におまらりいりあつるしあふも後^い草の花

を尋ね中に

蓮は法師

あつりり紅糸をしりし何のあつる娘は多をうら

檀律師にえ

高野の地はわらぬの次にをそしてあをうらるるのよの月

水治元年讓位の後^{あつ}書わ付けり新嘗會

の日皇后宮のあつに付けり人よりのり

皇令后文々支後成

りたしりし日記をみくも思ひしり高野^い草はあつ

書きた

源義氏朝夫

羨るる雪はうしろ凡そしてをしめのうらむうらむ
雪のふつとけつをみくもえん

上西門院無家

世中にわたるうしろ凡そしてをしめのうらむうらむ

歌一々
よみ人一々

里人のうらむうらむのうらむうらむにまゝなるをうらむうらむ

曲体親子朝夫

うらむうらむのうらむうらむにまゝなるをうらむうらむ

平村茂

ゆり人のうらむうらむにまゝなるをうらむうらむ

前開白丸人老 雪句

泣き雪とて我を雪の雪み我に世にうらむうらむ

野徑雪とて人老をよみかける

丸道中将師良

春日野のうらむうらむ世にうらむうらむのうらむうらむ

雪句一々
前大納言良教

寺にわたるうらむうらむ世にうらむうらむのうらむうらむ

建永三年吹田一々うらむうらむのうらむうらむ

前大納言考家

まのうらむうらむのうらむうらむのうらむうらむ

續拾遺和詩集卷第九

羈旅奇

旅は留りかけらんよひのりける

二条々身人后文人貳

しづかはるうらうらと道中をみおほし相いするは

けつし日まうとけらんよ

藤原昭徳朝長

こゆしこ思ふわづらわれちの心けつよかけらん

歌しつゝ

光俊朝長

おとと相とあふしと白あは旅行人の袖にまき

あはは思ふかけらんよひのりける

津中潤行 経國

遠しをいにしゆえゆらんわづらわれちの名をわ

源光りわにまよはるかけらんよひのりける

如教法師

旅しるきそとにゆゑわわらん人あきらむお旅の用

都にのちつとく程多くゆかりける竹もた

藤原京経

かじりてんふわづれの名をわまたわわ旅の名をわ

不破の用屋と書けりける

よみ人〜家

みまにふらうあつこりやゆりま〜用いゝあつみの中山
よのほりかけら道ちす〜くよえら

友系頼景

たまひやのしよかすえことよせしとろくえはりの
道助は親王家のよすえの中に旅春雨

ぬねは師

とれい〜かひてお〜考るの古々人と袖あ〜多〜蘇
様ごを

前大納言賢喜

志るのちりみまのさつやゆり花み〜さよりとぬうの

頼中故ごとよまると 前大納言為家

うじつり日投ひとて〜れて友草は衣故ははうるく
わにほの〜にまのれつとけら思いの故ごよ日
投ひた〜ゆ〜故にもあ〜けれいよえら

津ち國助

白河の用ゆ〜ゆ〜ね東路とゆり〜(おれは故ごはう〜く
歌〜〜か

親意は師ま

夕暮い〜つとよさじ〜故ごはは独ひや〜えん白河の用
頼中納言具房

まわのれ都つ〜に〜ら〜ら〜と〜は曉あは〜らなう〜とるら

法下最信

春多うこしちをこりりよひね日氣あくるまの^し外

前大僧正通玄

り言ひ野原の畑は草枕我よりよとよよしすの春は

大江頼重

草枕より秋の袖に春ちりて尾花吹く野原の畑は

寛治元年十月五日 春は松尾

皇太后宮人丈後成女

春けりそ秋のそり草枕は吹く畑のまひね

この中よりよみかへり

中務下宗尊親王

春より朝言は袖は白くは畑は白くこの中より

歌一あす

前大納言為家

詠めり思ひは春一月に都はかきるこの中より

後京春徳

春より路のまはるおしるをたのむ畑のよめ月

平時村

春より野原の春は草枕いくよの月の花をよめる

松常月とてしを 松大納言實家

春より春の春は我も甲月ころ袖は白く

修りしはけり月をみく

麻人信正行書

月みれはるにたつうとく我思いおとをこ都をたて
家よ又すまき言淡休けりよ野松

入道二不親と道助

草枕引しよの房を寝りく袖にしるる野(の)月を

野松様の心を

辰三信考継

うらわに葉もくげく松人をさうひて出ら有明の月
濱名の橋をさくくよと休けり

中務下宗尊守親と

まゆより小湊の舟の明りよ松系みして月うのと我れ

歌しるる

光明寺も入道前松政たんと

月わしては夜日くは月乳にかかりていけり為娘の松人

祝部成茂

朝身乃ららり日よの松衣アもくましくなるといふ

娘の言にさくはめよと休けり道よの松大納

成通しるるにりりけり

西行法師

嵐もくまの女葉にさくあひくいにちうらるる人成と

寛治元年十月三日右に松宿院

法下良實

今も様じりのわしを志すも又尋たづいさみうのうは

歌~~~~
平の氏

ふつみら治よかこちらよのりのききとせわや都るを

白河殿七百三言又幕中し

行人納言行は

都か〜り較とのころかひ衣越え行ふかこちらよ三言と

様言の中よ
人死アヒ宗

ふ〜おくま〜ら〜つ〜た衣ふの用を〜ふ〜こ〜ゆ〜

衣笠は人衣

様人の〜ら〜の用のり〜と都つ〜こ〜い〜き〜

様愛といつらんを
普光園入道前用白こふト

立つ〜我都を〜の草枕くさまくらはす〜り〜の愛ふ〜

す〜つ〜け〜く〜よ〜ま〜ゆ〜け〜

前大僧正隆年

七十の年ちらゆにす〜つ〜け〜むの波なみ〜らかけ〜ら〜

伊帆よゆりけらんよ

小弁

ちり〜く〜つ〜う〜尋たづあ〜す〜つ〜こ〜ゆ〜人〜た〜信たづね〜こ〜

ま〜〜所ところにま〜つ〜け〜らん人のゆ〜り〜て〜境さかいこ〜ゆ〜

万里小路右大臣 千代
右大臣

何れか〜み〜このよみ橋花を〜考のり〜にそよ

嘉永二年鳥羽久〜池上花こ〜

富家入道兼用白右大臣

〜池の水を我〜に我ら花の陰をのけ

寛治百背言〜竹松と夏

常盤井入道兼左大臣

咲け〜後より〜考日し松をそをい〜けいふ

文永八年七月院忠〜御書付けり

女房の中より毛かめ〜末をく〜せ

まじり〜の夢因ゆ〜に依けるぬま〜

兵部少輔隆親

昔より毛〜宿か〜我〜を松虫の〜

弘治三年九月十三日裏ナ〜言〜竹月

麻大納言孝氏

麻祝

毛の〜書おの月を我〜から〜也〜け代の花

家〜言〜淡依け〜祝

入道左大臣

雲〜と〜氣を〜く〜久望の月〜の娘とす〜

寛治八年毛〜言〜祝池上月〜

権中納言後忠

のこりる御ちをうへて池水に母とすじつは娘のよ月

寛治元年十月五日海色月

心三任経朝

わろうらひ昔より波のこまきわさるは娘のよ月

月二年も母久又そ言ふ月麻祝

辰二任行家

老の世に老をうへて末をきこふことの娘のよ月

月と娘久こ言歌を傳ちては休し時

左人志

いぬ娘のまきつゝ世月の老こり老のけ彩のぬりるを花

又永又年八月十又和の裏言今日田家見月

麻中納言賢宣

民のよこ田圃の香の娘はよるのそい月とこりるが

辰一任倫子七十賀日後休ける

寛治入道麻用白台政大長

老のこりる世をかうしてまきの花は末をきこふはひみれ

百言言の中に 式子の親日

しすのこりる末もこりる老の世は家のいとれを争は下伏

菊花娘久こりるしを

大宰権師為行

いりりちをとおぬをかこぬしよ世のうらむ白雲のりふ

正治百三十一祝

前大儒正慈鎮

ふ年ゆくりしとれふ年ぬちるーこ舌をかこぬる病の毛

歌ー

は成古入道前権師を政大長

わーぬじのよりいーわーぬる世ぬよしとの教りきんか

正海祝こつちちんを

吉野野井入道前を政大長

海原の凡あこぬれら波の上よ思ふとこをーち代まけり末

又永三年三月續古今集竟宴三

後花園院入道前を政大長

教くまみくまとのわーぬれと片代静なるわ品浦浪

建に三年十一月和言所く輝阿九十賀

ぬぬいとけり射よとぬけら

前中納言定家

あよふふ十とせの教をゆりつぬし九つこの万代やん

前中納言範光

限るこころのしほのをふれいふまの坂も信くぬ

大納言有家

老らくのころぬく通を照すくちりてこころの暮の月乳

建永久二年七月二十三日

冷泉左大臣 于内大臣
左大臣

をるいくきいすもわさるのりらみるこのよはる月

祝のふと

権人納言也家

大系つてふのねうきり代はいけりわさるあき

建暦二年三月のみるこころいおこるてけける

次乃日前中納言定家もいりける

参議雅行 于内大臣

志ゆらこころいすあけ水いせうふきりあはれをに

今とのあき服の付大納言いゆりあけ上書つ

こめゆこ思いけりをゆける

兵部卿隆親

年たけこ思いこころいすあけ水いせうふきりあはれをに

建久九年大嘗會之基方の出屏凡は内中

國神嶋有神祠所也

前中納言資實

秋鴻の波のきりゆりもあきこころいすあけ水いせうふきりあはれをに

仁治三年大嘗會悠紀方凡俗言朝日也

前参議考長

わさるけりあはれの初めの朝日いあきこころいすあけ水いせうふきりあはれをに

志禎元年人嘗會悠紀地方巳日の樂破

道江回真又村 麻中細吉家光

さしおのりをはがらしてゆきの村わよはるをいよくあつた

又悠元年人嘗會悠紀方脚屏凡奇玉

井 民尸マ經光

すーらまふらとをいひてししよふハ

玉井の氷如松のトクを

續拾遺和歌集卷第十一

悠奇一

正治百骨^{たまたま}のちりけりよ悠奇

自ら后宮人又後成

悠衣いさうめけらまかれい思へいさうくうにらんう

初悠のんを 古片門虎少製

をゆきめくいそまらま之玉屋廉ふふありさるんわつと

はち元年百^{たまたま}のちりけり分印^{ぶんいん}のんを

衣はまけ人夫

とらまらし信に我まぐいりくまは思をいん人下悠奇

歌——か 日大光

高——をいじりるしひける^家 高——いひぬきしすの油のきり
前抄改丸大光

ゆきくちろ袖ね白玉^後 後ゆきくちろ袖ね白玉^後
家に百三言よとふけりよ初意

あよくみこれうめあこま——とやんのうらぬあしらすり
後法性寺入道前用白を改丸大光

いじゆくの思いこれくむす——にれをえを思ふしあ
前大細言兼宗

建也二年八月十二日又もゆか三の今日也意
前名兵衛持者教

水こよりの玉江のわちこに——よ思こころをぬきしあ
細抄改家。百三言よ——んを

常形丸井入道前丸改丸大光
直は凡吹——の音ねくのうれしたこよあち油か

後鳥羽院片断
とら田ねるまうひの夕煙しき入思ひを——うた

春官丸持
とら飛——くゆる煙の煙あのもくよけこ思いあつた

建也三年九月十二日又も三言今日宮持也

意こころんを

万里山路名人を

ちり飛るぬくとの旅下ちりにのしりきふ思いのまきしうこ

あハ

百首言めと飛りにあてし

太と又身

我りうーのふろ中による物いさうふろ袖の洵あちをうと

春官人実實兼

ふめううし声の志のつれあひぬよあそく袖まひりいし

意うあ中子

前人納言為家

月こし江の氷草かくれのうらあさるうらうらにも知人あは

意治百そ言うりけらにわくく日宗の傍意

後境義代止書

あきくくしうこ一船もよああ心あ人ともく袖あ傍に

意月意

前人納言為氏

し乃とに文くせう月氣の又けいぬあまいそとあ

辰三後行朝

宵あまはうのえぬく三日月の氣りあみ一人又意う

意んを

去ら門池小亭相

あよあみく雲わあよそにけり月の夜あもあそあわつあ

後境義代止書

いこちあてあふらよりのあうそあ思ひとあそあわつる月小

忠意の心を

わの洞ほら房ふらとせしむる櫛くしくよはゆきとせしむる櫛くしのほのたは
道助は親と家又十三年のよき櫛くし意

参議雅行

とせしむる櫛くしの櫛くしはよき櫛くしの櫛くしは

歌うた一ひと家

ほ二位好家

歌うたくもせしむる櫛くしの櫛くしはよき櫛くしの櫛くしは

前左兵衛督教定

うらまはせしむる櫛くしの櫛くしはよき櫛くしの櫛くしは

忠意の心を

前大納言考成

いそしむる櫛くしの櫛くしはよき櫛くしの櫛くしは

前大納言考成家の百三三の

正三位知家

年抑しとせしむる櫛くしの櫛くしはよき櫛くしの櫛くしは

寛治元年十三年のよき櫛くし意

前内大臣 師

人しむる櫛くしの櫛くしはよき櫛くしの櫛くしは
洞ほら小

陸奥内侍

思ふしむる櫛くしの櫛くしはよき櫛くしの櫛くしは

延治二年九月十日のよき櫛くし意

兵部隆親

一又いふ年物言はれに其の娘の父は其の
歌一々

高砂尾上のねも夕西の夕も夕也年を多れに十
建仁元年又十三年うけつけりて宗書意

前中納言家

一又いふ年の父紫の丸西の言はれしは
意の中よ 如新法師

袖乃多をさすの人もさすはようやうに
寛治百三十九年けりて宗書意

前大納言基良

き袖のるるは多しはるのよふは衣座して
文永七年八月十又衣の裏に宗書意

後系為世朝未

いふにいふ人たきりて同^後神のりては
歌一々

喜久大納言

いふに袖よりかきりては
後二后の家

とく神にまかせしむるはまこと思ふべし力成と思ふはつゝの御心

中務少輔宗尊親王

いかにまこと思ふはまこと思ひに侘りやの命しゝるし
年へてしゝるはまこと思ふは我のまこと思ひや公の
夫對面をまこと思ふを

皇太子后父大夫俊成

人々ねむるはまこと思ふはまこと思ふの御心は
河津橋の家に百もまことに

正三位右大臣

そとまこと思ひはまこと思ひのまこと思ひの御心は

はまこと思ふはまこと思ふの御心は

前大納言為家

いづもまこと思ひはまこと思ひの御心は
高階宗成

高階宗成

はまこと思ひはまこと思ひの御心は

前大納言隆房

まこと思ひはまこと思ひの御心は
女のまこと思ひはまこと思ひの御心は
かまこと思ひはまこと思ひの御心は

いりりける

蘇大納言行房

とりりけいじとみゆら玉葉いかにかにしきさのまら

歌

藤原則後朝也

わらわのつみとさしはれぬにまはにおわ袖のまら

九条九人老女

今うらまはしとて御^後洞河津也

小原雅有

なまけりあせに園じよしとるる名もわらわの

受百奉田あか

蘇大納言兼宗

もろもろしきつとるる洞のけり

意の中

蘇大納言為成

是いひねむしとるる光の洞のこ

大将いひけるは又いりける

中もりけるは

三三三とるるおま言はるる

山階入道九人老女

蘇大納言為家

ふいふにわ中の用を

家母百言

後は性も入道

高岸の洞はまる今つて毛を思ひつるを

刑部頼輔

人此す思ふをちりるを思ひつるの枯れし

名所百首うけりける

信正行意

と方いりしを神にまかすの枯れ下

歌一巻

皇太后又人史後成

とてし神をまかすの枯れ下

高岸の洞はまる今つて毛を思ひつるを

とて又皇

よら言のを思ひつるの枯れ下

歌一巻

典依親子朝

人志我す思ひつるの枯れ下

西行法師

みえりる洞はまる今つて毛を思ひつるを

名所百首うけりける

わら磯の波よとがらひの思ひつるの枯れ下

歌一巻

鳥を乃くればとて思ひつるの枯れ下

後鳥羽院御製

そ乃に...あむく...有る...
前抄及た人々

下...いし...思ひの夕...
亦人納言為氏

い...い...い...
権中納言為雄

か...い...い...
源治百...
権人納言忠信

あ...い...い...
源親也

源親也

源親也

源親也

源親也

源親也

源親也

源親也

文永二年七月白河後七百三十一号綱目

麻中細言雅言

伊豫の海に綱のうを縄つるにいとむね人よあひに
いづちあける舟よ女につるけり

後頼朝也

ましろに雲のきこゆるはなは

歌一か

麻名大持頼朝

ゆらめく雲のまをうつに

百三十一号

麻名大持頼朝

あつらうらと水のほのつる

ゆゑ百番の命よ 後鳥羽院の御

うらむら雲のまをうつに

歌一か

麻名大持頼朝

あつらうらと水のほのつる

後鳥羽院の御

あつらうらと水のほのつる

後鳥羽院

あつらうらと水のほのつる

平村

あつらうらと水のほのつる

常盤井入道前を故人夫

あしごころみわりのあはれをこゝろあはれをたておにの滝の白玉

歌———

光明寺も入道前持取人ト

年(おろち)のふ川より柳(なづき)ていづと———をたけす

河内持取家百三十一のよ不遇也

常盤井入道前を故人夫

清(きよ)り———のこころいづしひけあつり氷の(あられ)もみそ

はち二年の裏(うら)は百三十一のよ不遇也

前入納言為成

はゆまののわあはひひに———のこころあはれ

意(い)の中(なか)は

賀茂重保

うやほ———滝(たき)邊(へ)坂(さか)の用(もち)えしわろし島の(しま)の(しま)をけし

和泉式部

みな人を(みな)人(ひと)———のこころいづしひけあつり

心(こころ)持(もち)百(ひゃく)三(さん)十一(じゅういち)の

心(こころ)持(もち)三(さん)十一(じゅういち)の家(いえ)

とろ———あつてあつてあつての(あつ)つらあつて

歌(うた)———

よみ人(よみひと)———

あひつむに(あひつむ)れる(れる)こ(こ)中(なか)に(に)あつて(あつて)を(を)命(いのち)に(に)た(た)ま(ま)し

文永(ぶんえい)十年(じゅうねん)七月(しちがつ)の(の)裏(うら)七(なな)三(さん)十一(じゅういち)の(の)

志(こころ)後(あと)朝(あ)光(みつ)

ふくくわひしし命をと思ひ思入し

意の心を

ほ三位朝臣

ぬのちをく人の心もみりりうにちよとわ命たのふ

百三十四

本朝門地を運

契を情らちをにりちのる世にちよとわ命たのふ

欽

平好氏

契しちよとわ命たのふ

契思意を

後系為世朝臣

今又わの命のりけとをうとたよとわ命たのふ

意の心を

兵部卿隆親

違し方いに限ごめ

長二位朝臣

わの命たのふ

契治百背

源後平

意しころん

入道二品親

律古國助

よの命たのふ

建長三年

陸井の体

遺傳の命を人よ受く事うごめつてしるは思ひ

志乃奇き

曲は親子納夫

わふまに流るかてあつて我よ今計りし命を

山階入道左大夫家ナキ言前に不遇^達志

前大納言考家

ゆのまなわふよつてこぼら大今いく程のむぬいのら

歌しる

平時直 宣り

わふまに思命も限われはあつて程さつ人のけれきよ

中務^三宗尊親

思ふにまよわ命のけれるさつ程さつてさつよ

平義政

思^らふにまよわ命のけれるさつ程さつてさつよ

藤原基頼

わふまに命を思ふもの思ふ人のつらさなま

久慈の心を

平政忠

わふまに命を思ふもの思ふ人のつらさなま

百^三言^三時^三付

是助は親

今又わふまに命を思ふもの思ふ人のつらさなま

志乃の中

中務^三宗尊親^三家^三小^三督

かくいせしむいそ人の思ひて後世とあつたるは

信實朝夫

いふにふしん乃そのに我まよもか成るゝて信つまは
ま^世一^世由^世果^世を^世り^世く^世信^世國^世の^世命^世を^世お^世り^世思^世い^世け^世る^世

左近中将貞氏

あつたに命を我らつたわらうあ致くも信しに我なるも
常盤井入道前々人た家より又ま言淡付け

山階入道左大夫

思ひ果に後し我るも命のふいけり後のあめとちりわ
又此二年九月十三日又ま言命より不達也

辰二位新家

いげの思つてつと人く信しを信るも命を信るも
信言の中に 信信信信

せろみのいふけ我もあを信世を信に信りわ
変治百言言もわける所言系也

女部門内女部

志を命人のこめふいあさうの京もあまも
信言

直隷門内丹後

あまのいふ言りわらうあ我男が若下にくい
女の許にけりけり

後徳人ちた久未

志をんりあさうしと思ひおく夕れ毛い

うれおくこと

續拾遺和詩集卷之第十三

志奇三

千五百番言合に

赤議雅行

ひくくしをの光也波おもくを返にたし建るこよこの唄

久五百言言日

休賢門地塚河

に我ををいとあひくさうと云言ふに種とく思うらよ

左近大将朝光北将も休ける付にけしんも

あつと今いかきつと命りかぬのこころと申あつを

はれあつと日く我まじよしき

三条河内公人左近

こゝろ乃面けきうふいまうるや我ハ月を成恨し

歌

前大納言實孝

結らひく引くつと有次ありつとの月つきけがれはなしあはれはうりあり

入道二親之家ふたのちか又また十と三さん三さんうう

は格引併

あめいさどひひつあを契ちかま有次ありつと居ゐくのも月つき如ごとく

意い考こうの中なかは

中務マ宗尊親なかつむまむねたか

今いまもこたのああ人のゆゆをいくわつとあをの月つきは結むすん

と階入道とがいだう丸太まるた

いまもこたのああのええああらの月つきをうにね結むすいけり有次ありつとのえ

権律師ごんりつし玄げん是ぜい

秋あき出でらひけいけいけいしあめああと人ひといああよのよの有次ありつと如ごとく

秋あきえ意いここししららを平頼泰へいらいたい

いあゆくとまにわわみの有次ありつとをううええ次じ鳥とりののいいああ

は下した憲けん實じつ

きのああとこいああ人のああひひくくははううままああいいああ

秋賢門あきけん地ち堀ほり何なに

はるはるよよららいいささつつととああははままああののししららいいははままくくここみみああはは

中務マ宗尊親之家なかつむまむねたかのちかの百ひゃく三さん考こうに

曲まがは親おや子こ朝あさた

あつこに依こいみし焼くよつとぬんわ我えううう

歌一か

藤原白丸久長

春日

笑しを看ううに任わつぬ思ひわらす現おけ我を

宗の愛意こいつを 後京考行

らうくよの看をう今いれけ人の笑つも現をうぬハ

意等の中よ

式子の親也

いにま乃つみの現もゆこも愛より看にゆい思

藤中納言定家

名こつと何いたきこもまうまう家思ハ人そううみけりハ

高階宗成

にわた又うこ名やゆん違しハまうううの浦のわた

文礼又年九月十を我白何及言合ハ恨不違

意

藤中納言雄

に我等こかじうみくも違しハまうこ松の社なる我

意意二年は任ち殿の殿との言合日ま不遇

意こいつらんを

藤原通経

よ枕をうこすりあゆの笑まは任けこよよりの下云と

歌一か

津守國基

わいみくの心命うこを思ひ我にうううんたもて

近衛用白丸久長

歎けく思ひも我りるしひも道みくも此神の如き
一宗の建上意といふらんを

普光園入道前用白丸大木

此妻をよそうしす入下^{ちか}建のこけわつこの中れ勢つと
弘長元年百三^{ひつ}言けりけり初^つ遇^つ志

麻大納言為家

多^ち枕^{まくら}よしすふすこの初^つ尾^び花^{はな}らぬ袖^{そで}之^{これ}居^ゐけり言

衣笠の丸大

月車^{つきぐるま}のりあつこの帯^{おび}いけ初^つ思^{おも}く思^{おも}多^ちを後^{のち}よこ^この
よけくきつうとける人のまへに上げり道^{みち}のまへに

思ひて我て淡^{あは}けり

相模

な成^{なり}ころたけりゆへ人^{ひと}よりととらん道^{みち}に向^{むか}し

一宗用意^{いっそうのようい}と^と唯^{ただ}宗^{そう}忠^{ちゆう}宗^{そう}

逢坂^{おうさか}やわ我^{われ}をさしう用^{もち}る^{もち}るゆへにけ鳥^{とり}の宿^{しゆく}を^を恨^{うらみ}

弘長元年百三^{ひつ}言けりけり分^{ぶん}曉^{あき}別^{べつ}志

三^{さん}位^いの家

志^し想^{じやう}り^りの^のわ^わつ^つの^の覺^{かく}つ^つの^のら^らは^はへ^へじ^じら^らひ^ひ也^也

河内^{かわち}抄^{しやう}取^と家^か百^{ひゃく}三^{さん}言^いは^は後^{のち}朝^{あさ}志

麻中^{あさなかつ}納^{のう}言^い言^い家^か

始よりわがわがの我と因かゝるわがにふちこそ人を志す
はち三年九月十日と我十と我十と我十と我十と我十と
月前別志といつらんを

太上天皇

きぬのなほを月にかたてしりしうとふ有わをのえ
歌し〜か 麻栲奴久末

に我多てわがを我の月影と信し〜ねる切のう
はち元年百首言ちけり〜曉別志

亦大納言為家

別海の有わをの月も〜に信〜と余はに我を
ま

志三の中目 道徳法師

今うちるにあり〜と同一有切の月とわがの袖をう〜

典依親子朝末

ま〜いにたのぬわあ現〜と愛〜とあ〜と別〜か那

中務マ宗尊親と家百首言よ〜志のんを

喜司院師

ゆ〜らまわ神よか〜とけ〜と父〜とを愛〜と思〜と我す

契別志といふしを 平清時

契〜と後を結〜と余〜と〜と〜とのけ〜と別〜

後信性も入道麻用白家百首言は後朝志

皇太后文太史後成

別じらるるこの程をくくくゆらたきくくゆらたき

隆信朝也

康乃らよききこけこの康よあもゆら我きう之清也よ

心治百ききき

二五代譜也

康けこゆらわらるる康よあも福尾也わつと明の月

嘉のくを

後膳義隆片書

わつとあきわを假し思ひしはゆらわらるる油のくく

人のしきよりゆらわらるるにゆらわらるる

檢中の言はく頼

くくわらわ核のゆらわらるるにわらるるを人よきこら

嘉きき中

中京の實

くくわらわ核のゆらわらるるにわらるるを人よきこら

嘉きき中

京極の片

ういこもゆらわらるるにわらるるを人よきこら

建保百ききき

光明寺も入る片抄取たんた

ういこもゆらわらるるにわらるるを人よきこら

寛治元年十月三日合日逢辰會意

後鳥羽院下野

中一ろく人へふけれ分りてやいふし後には

歌一ぬか

平行氏

遊しをてわらふと思ふにこのちりていぬるありき

行念法師

人ら思ひにおねよとてわつらふりあふし

赤杉久人木

今又ぬの夏路にかよつて思ひ移るにみらりて

後鳥羽院片書

うしみら夏より後のんをともぬるにいづく

家に百草奇談ゆけり

中務下宗尊親王

いとくうにのこ成にふかや昔の夏のはら

掃書^送意のんを

信中約言行年

夏より思ひあてや成る向^子にわらふる

百草奇^送り付

麻中約言雅言

う所のいよりうの段にもふれなるの何のこる

歌一ぬか

平親清女

いとまをけりて段のいふれいふかたてぬ年とわら

文正七年九月日裏三草奇^送り

藤原隆持朝夫

あつたしよりの故に流罪并んば十昔の

うし浦の

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

續拾遺和詩集卷之第十回

志守曰

弘長元年百首三可^{あまのつち}まけり時逢^{あは}不^あ遇^あと

いつらんを

常盤井入道^あ前^あ左^あ大臣

甲^あ世^あに^あ留^ある^あ夕^あと^あ我^あを^あま^あけ^あく^あは^あら^あう^あと^あわ^あら^あう^あと^あわ^あら^あう^あと^あわ^あら^あう^あと

歌^あ一^あの^あか

前大納言^あ為^あ家

あつたしよりの故に流罪并んば十昔の

前大納言^あ為^あ家

あつたしよりの故に流罪并んば十昔の

平親清女

さうしてしるしは縁し夕言も今よりそらる方の契小

文永二年九月十三日契言合は後志

は二位の家

おのち一づくのじりにあそく我書よあむ夕く我まを

九月十三日契言合は同を

前人の言良教

わふ坂のちつりるる年る我人の人うきこるあけら

契言合を 権中納言具房

うしおし思ひしりて思鳥のひにまゝ道坂の尻末をうわ

河津橋の家百三言は過不違一志

藤壁門地井将

逢し乃後ゆらちうつし思ひ控の契言合

志の合を

か一人を思ひ出らしるしに夕の月のゆり社すし

文永二年八月十三日契言合は月暮る後志

とと天皇

何と又思ひ控してさる方の月みらしし袖のあそし

家は言合はけつに

権中納言長方

縁しまた思ひしりて思鳥のひにまゝ道坂の尻末をうわ

こころいける男にうかお建にける女よかづき

前中納言建房

うき青女のまねにけりて古々の花のこころい思ひ出るし
宗歌をよきこころを

前中納言雅言

し頃の花えつてはるのまよひ年しと思ひうめくし

一巻奇の中に 源有長朝夫

ちととと神の志るのわづら名をのこけておしんを
みわ社の日人のこころわづらうへくけりけり

祝部成茂

まてふうねるにこころけかたふのかうの志るこころ

一夏良志 右衛門督實光

夏のこころうきこころいけりてわづらうのねるこころ

建仁二年志十巻奇今も夏志

皇太后夫人丈夫後成世

ちとちやまも種をこまぬくのねるうめのまねくみえ

四月のうめあけりてうめけりて人のこころ思ひ

につらけり 實方朝夫

あひねのけりこころいけるこころいけるこころいけるこころいける

白河殿七巻奇宗の治志

後醍醐天皇御製

かく我身のおもひのわがみの我を我りまじしごとく
男にまじりてはけり人の又月又日花の草葉を
くさくさしくけりをみく

志保山門

かくはるる花のよ花にけりわがみの花をけり
わがをけり男のまじり又月又日人よかりごとく
りけり 周防ゆか

さへはるるわがをけりわが草のよ花にけり
よ花の中は 麻たよ花は皆あや

交草のまじりて水のわがにけりしあはれ中へ知人よ

源家長朝也

さへはるるわがをけりわがをけりわがをけり
は眼慶越

けりわがをけりわがをけりわがをけりわがをけり
宗輝志とらんを 丹波尚長朝也

交りわがをけり花のよ花にけりわがをけり
く けり けり

さへはるるわがをけりわがをけりわがをけり
宗七夕志とらんを

股富門比大捕

かきつゝしきしむ思ひがらゝぬしう増よふ雪のよそにもけ

七月七日廿一日りけら

行中納言政基

かじみくもきしむ物を七夕いふの煙のさけしけりまつと乞

歌しき
よき人しき

逢しきふとこのつた川のともりいとけういととるありを託

人の海よりりる
前中納言資平

ひけるに思ひとちりしわさちふの山野の納言よつとをし

中務マ宗尊親と家の百そりよ

克後朝長

凡嘆いさくよふ雪のえにのよ頃てわ思ふ娘志りふくれ

歌しき
醍醐入道兼を政大も

あめしや思ひ娘いちよふしとに娘凡のねよあくと

方つる日は思しききしけり人のみかじり

ころゆめしきゆにけり朝あはわさつたを打てけり

りけら
世々報

かきつゝふうたのわらわうつ娘のえかたあすも標の花

ゆき
よき人しき

いほれとくましくいにわさつたのわさつたうたうに

建保百三十七年

前中納言宣家

初^{はつち}居のこつころ凡のこつころしわ^わね^ねひを^を後^ごよ^よに

一^い志^しの^の言^ご中^{ちゆう}よ

う^うあ^あけ^ける^る人^{にん}の^の心^{こころ}は^は娘^{むすめ}凡^{はつち}は^は娘^{むすめ}の^の下^{した}葉^はは^は多^たう^うに

百^{ひゃく}三^{さん}十^{じゅう}七^{しち}年^{ねん}付

西^{せい}京^{きやう}下^{した}葉^はち^ちう^うと^との^の娘^{むすめ}を^を思^{おも}ひ^ひに^に恨^{うら}ま^まい^いり

山^{さん}階^{かい}入^{にゅう}道^{だう}左^さ人^{にん}を^を家^かす^す言^ごに^に寄^よ娘^{むすめ}凡^{はつち}志

女^{にょ}島^{しま}門^{かど}内^{うち}家^か

娘^{むすめ}凡^{はつち}の^の吹^ふい^い返^{かへ}り^り言^ごま^ます^す京^{きやう}我^{われ}し^し人^{にん}を^をう^うみ^みだ^だす

寄^よ娘^{むすめ}月^{つき}志

力を^{ちから}娘^{むすめ}の^のあ^あま^まり^りを^を使^{つか}ひ^ひに^にま^ます^す福^{ふく}の^の月^{つき}歌

歌^{うた}一^{いっ}分^{ぶん}

娘^{むすめ}は^は女^{にょ}人^{にん}に^にけ^けれ^れる^る今^{いま}よ^よの^の世^よは^はよ^よし^しと^と終^{はつ}つ^つり^りて

后^{ごう}二^に位^い家^か隆^{りゅう}

そ^その^の世^よは^はよ^よし^しの^の續^{つづ}ね^ね下^{した}葉^はは^は多^たう^うに^に人^{にん}の^の終^{はつ}つ^つり^り

心^{こころ}二^に位^い家^か隆^{りゅう}

う^うに^にう^うの^の世^よは^はよ^よし^しの^の終^{はつ}つ^つり^りて

後^ご京^{きやう}永^{えい}光^{こう}

人^{ひと}の^の言^ごの^の笑^{わら}い^いも^もく^くと^と多^たう^うに^に娘^{むすめ}は^はい^いく^くの^の世^よは^はよ^よし^しの^の終^{はつ}つ^つり^りて

歌

勇祿好忠

引しつと世ら凡のくむとに林五月町^{とん}向うつより人をあつた

本島門地志念

誰り又りくこ枕は思ひせよとく一我のそとちり我は

と愛治百そ^{とん}うちりける射言の島志こしつと

地中好内休

いと光^{あき}印^{いん}えちるね其のこころをそとの社^{いそ}なる我

建保八年の裏言今よを史志

参議雅行

同^{どう}きく袖の物をかき取てしよりの契^いハ
ハキムハク

白河殿七百三十三の月車志

前中納言賢人平

月車乃うしろひアまきこんをまかりりよまろくおぼろね

道助は親し家又十三三のれ中よ宗の車志

西園寺入道前左政大夫

月車にうしろろこやついで源朝一人のんもろりもつとゆく

又永二年九月十三日又三三の今日後志

後醍醐天皇御製

いよしむた田の草の中を我やまろりろしむれは後志

志三の申よ 志明寺も入道前左政大夫

うしろめとまこの草のしかり我いろろろと後志

百三三の申よ 信大納言も雅

あれよあこみの夜うしろしは泪さるる袖をみまも

志治百三三の申よけりけり付宗用志

前左政志定

ろろく人とりくわむしつこの衣れ用をまろりろ

志明寺も入道前左政大夫

年つわろよのついで継橋もろりろ中よ後志

醍醐入道前左政大夫

別れはむのしつ橋中後くるるかよつと道志

あひまの事さうゆへ年月を忘れすまけく我らも
中務下宗之親之家百三十一

喜司郎師

わが社ぐいさしつゝあをわひうゝとちひるる

白河後七百三十一言付迄

前大納言賢吉

年(也)ちるる言付のよぬに枝のいりる人よ又い遣み

志可き漢体多 武乾門地片運

後(也)ちるる言付のよぬに枝のいりる人よ又い遣み

大炊片門地片運

あつとく又遣向のよぬに枝のいりる人よ又い遣み

後据け地片運

あひまの事さうゆへ年月を忘れすまけく我らも

新陽明門地片運

有(也)ちるる言付のよぬに枝のいりる人よ又い遣み

山階入道大納言

檢中納言公雄

あつとく又遣向のよぬに枝のいりる人よ又い遣み

三三三行結

御鏡(ついで)にわをこりゆにまゝぬりせし形(なり)

寄鏡恨意

辰三任光成

いしとくくまのなごうのふか鏡我こに人の心を思は
た片門此片製

の鳥乃をらののふまわしおしうさるをみては福をうけ
弘長元年百三十九年つけの付逢不會意

衣笠の大夫

みまらふ袖のわの秋乃うのまに周の人のうこそ

取しうか

後鳥羽此片製

まの柱面敷へ思おりにしをうあふ言らよ

百三十九年付

麻中納言賢宣

このまにに今のおかひに年月をえあふとま

意うの中に

麻用白丸大夫 奪日

うられおう乃面敷をきうていに結まの命如し

源兼泰

うしこみへあは信つれをこしをうの命あをれ

信州信都同勇

よまは成候わら世のやういさうに福を思ひ命を

弘長三年の裏百三十九年付信草意

近衛用白丸大夫

朝のよめうらへ思く思れ草今にに妻こらえ

九月十三日卯辰の間に後志

信人納言實家

ふひちちのころく年物ちよもきつるの秋のときふしとのんを

又卯二年九月十三日卯辰の間に今も卯辰を

入道の人夫 源道成ら

年物れどきくしに袖思れどわつらつらふん

一志のころく 志のころく

いひくぬしを思れぬおしよりうに

前開白丸人夫 一糸

面影をいつに思れぬうにありし思ふおし

女ににりける 津も國基

兼くすう人のんまつらひぬしをわつら

一志のころく 後京考徳朝夫

伴にきし袖の思れぬうにわ恨いさう人へ命

志のころく 志のころく

後志我地志

うもににりけるのわもは朝夕に

はもと元年百もあちりける付逢ふ會志

常盤井入道前左政人夫

ふけりよ袖乃う波立のつと思へり此も笑るあを

光明寺に入道前持家^{持家}家^家志十^十の命に言ふ
志

博^博い^いり^り奥津^{奥津}浪^浪の^のわ^わよ^よを^を母^母う^うか^かし^しに^にま^まさ^さう^うつ
志の^{志の}を^を 中^中京^京の^の範^範

う^うみ^みく^くも^もい^いく^くよ^よた^たら^らぬ^ぬ信^信吉^吉の^の松^松に^に礼^礼を^をま^まさ^さし^し志^志に^に
中^中務^務マ^マ宗^宗言^言親^親は^は家^家の^の命^命を^をま^まさ^さす

光^光俊^俊朝^朝夫^夫

今^今更^更は^はる^るた^たう^うう^うう^うと^とま^まさ^さし^し志^志に^にま^まさ^さし^し志^志に^に
志^志の^{志の}を^を 兼^兼用^用白^白丸^丸大^大太^太 一^一条^条

い^いじ^じり^りを^をま^まさ^さし^し志^志に^にま^まさ^さし^し志^志に^に
兼^兼用^用白^白丸^丸大^大太^太 一^一条^条

質^質茂^茂氏^氏久^久

ね^ねく^くに^にう^うう^うう^うと^とま^まさ^さし^し志^志に^にま^まさ^さし^し志^志に^に
被^被服^服志^志の^{志の}を^を 兼^兼用^用白^白丸^丸大^大太^太 一^一条^条

後^後を^をま^まさ^さし^し志^志に^にま^まさ^さし^し志^志に^に
兼^兼用^用白^白丸^丸大^大太^太 一^一条^条

信^信二^二位^位頼^頼氏^氏

乃^乃と^とい^いふ^ふの^のつ^つつ^つと^とま^まさ^さし^し志^志に^にま^まさ^さし^し志^志に^に
正^正三^三位^位重^重氏^氏

年^年を^をま^まさ^さし^し志^志に^にま^まさ^さし^し志^志に^に

前入納言為氏玉は鳩社とくの言合ことに付

浦月
檢律師定為

わろ浦北波の卜草いふく月よきくく名を助く偏

廣田社言合に海上眺を

前参議友也

波乃とこうふ又紫さみゆふ漕こぎとあれりおをわうふ舟

歌うた 後頼朝也

俺人のなうく海の波をたて袖の海にうねりをもよ

彦壁門地但馬

ねるねねきくにはままううにに見見むむろろふふよよきき袖袖うう志志行行

又百番うたよ 嘉陽門地越前

捨すててわつつかぬ浦のうにに見見むむ無無思思わわりり

述懐奇の中に 山階入道左大臣

ちりまくとおのの浦ををたふたなるるりりかかはは頼頼けけりり小

藤原為徳朝也

ちよちゆるゆりり入江の岸ののううにに見見むむりりかかはは志志にに見見むむ

前中納言資平

何なららなるるものの岸ののの世にううにに見見むむりりかかはは思思ひひらられれし

前内大臣 基

よよししたたいいししるるああねねるるののわわはは袖にけけるるはは

平重村朝夫

しんじつにさくらよはく入世死に信も世の月をみるか
しんじつにさくらよはく入世死に信も世の月をみるか

法眼良法

うし世とあへく入世さくらよはく入世死に信も世の月をみるか
うし世とあへく入世さくらよはく入世死に信も世の月をみるか

法眼良法

我がうすじに思ひし一しに月とやしる昔のさくら
我がうすじに思ひし一しに月とやしる昔のさくら

法眼良法

おくとろを留く世の埋木わつとくつりあすじにいほ
おくとろを留く世の埋木わつとくつりあすじにいほ

蘇我氏忠定

おとろ世にすみあはる埋木下ろくともさつろふ
おとろ世にすみあはる埋木下ろくともさつろふ

法眼良法

とろにのし林にのしふをさへ又おしつりすの松凡
とろにのし林にのしふをさへ又おしつりすの松凡

法眼良法

おとろ世のわつとくに回をれて又日都や後らちえ
おとろ世のわつとくに回をれて又日都や後らちえ

法眼良法

建仁元年壽今日山家言凡

位ついでにわんをいしあまの戸はたりの夕言をえ

歌一あす

は下行情

を乃にのこいこい一人を我くよびてえりら宿のなま

右兵衛持基氏

こらわのえ根のきにあくはく道後とじらふけのる

無動さになかけるに前大僧正慈鎮共かけ

あくうの世の民にかりふ我をたすみ達の

神ごよみくかけるまを思ひぬく後かたる

前大僧正道玄

祈いのちをこゝすをうたむるのたのみと昔條乃神

新日吉社の松金のゆくのえてのまは右無海

昔克能うたむるかけるよ競馬のしをさる

るして思いつけかける

右三位克成

うへうへいしを文よゆのじのころ梢のくらのトを

参議雅純とやうなにかける家にゆつとのつと

ゆ柳二つしのつとくかけるをみく後かける

右兵衛雅有

故郷乃くら木の柳のうのなまは我とわつらいをまよ

歌一あす

前大僧正道玄 一条

こころ昔乃よりのわしこめさつとわらつみの海波
中將すく年久しく志にまゆけり此よきか
けり
中納言敦良

うしと申しわらるる名はふらふらこのよき名をいへ
建永八年七月こそより述懐

前右無後督為教

うらりらたふみれこころにいふらふらこのよき
納言持政家百そよりいふらふら

藤原隆裕朝長

はらやわしつらのみらそに信をこころにわらふら

承元のは述懐すわらうと淡ゆけり中一
蘇中納言定家

なごころの親のつらみうしこころを思ふ道の心よき
範親女納言しく豊明節會日影をいへり

ゆけりをみく淡ゆけり
藤原為経朝長

あわれ方の思ひての日影草この世をうけて又ひきか

参議定行しくめく年官はあはれゆける

朝長がうけり
殷富門地太輔

うけりまをこころ神の板しと深田守文の心を志し

檢非違使にありくよきゆけり

藤原長景

うけりて^{つひ}目^めあ^らむを^つつ^の袖^のう^らむ^の付^りの^ゆら^く也^らり

力^をそ^う我^へて^後ら^る 源兼春

あり^しに^いつ^の甲^の下^のの^袖の^うら^むに^おら^せ目^を多^くつ^けり

建^治元年勸^賞作^りに^けり^をと^る一^部に^て後^けり

唐^のこ^し力^の志^もあ^らず^し我^の名^をつ^まの^のよ^きに^し也

百^三十^三年^の付^け 後^原為^兼朝^奉

つ^らご^うの^のた^りを^思ふ^は我^のよ^きの^に用^の後^け

良^遠懐^のこ^しを^前人^の言^良教

に^いふ^は家^の治^のを^わか^すの^要也^の鐘^を言^わる^は也

治^長元年百^三十^三年^の付^けを

前^人の^言為^氏

も^のの^いふ^は也^はけ^りを^たよ^しに^いふ^は道^のい^ふに^也

河^内氏^の家^の百^三十^三年^の日^本述^懐

前^中納^言定^家

と^して^かく^は也^は明^の月^は也^はく^くに^ても^のい^ふは^もの^初也

治^長元年百^三十^三年^の付^けに^て

定^家井^入道^前を^改人^也

平春時朝来

あはれいしりりあしこころよ人の歌をわづらひ

在 存子 知其愚 他人愚の心を

檢中納言行平

あつらひ我方いそいでわが思ひもくころをわた

歌 一 句

武乾門院行運

わが思ひもくころをわが思ひもくころをわが思ひもく

赤染衛門

あつらひ我方いそいでわが思ひもくころをわが思ひもく

後京ら世朝来

あつらひ我方いそいでわが思ひもくころをわが思ひもく

平親清女

あつらひ我方いそいでわが思ひもくころをわが思ひもく

百三十三巻 一 付

入道二親と行助

あつらひ我方いそいでわが思ひもくころをわが思ひもく

歌 一 句

平宣付

あつらひ我方いそいでわが思ひもくころをわが思ひもく

平時陸 惟宗 忠宗

あつらひ我方いそいでわが思ひもくころをわが思ひもく

後京則後朝来

うきとほしきことわめぬむらさき我力世にわら^後潤るありをうと

拾女信都殿雅

うき世に思ひあふよき力の程をうきおし^{うき}潤るあり

ほ二信家隆

うき世に思ひあふよき潤け^{うき}うき思ひのうきとけ^{うき}世

復是述懐こころしき

柳家俊忠

うき又うき潤^後のうきうきうき我力のほき^後のうき

述懐きして 体は純清

何れも人よも今うきうきよきわら^後潤るありをうと

前田久長 暮

うき世に思ひあふよき潤るありをうと

前田白丸久長 一糸

うき世に思ひあふよき昔も世もわら^後潤るありをうと

右兵衛督基氏

うき世に思ひあふよき潤るありをうと

九条前抄政右大臣

うき世に思ひあふよき潤るありをうと

常盤井入道前々政大臣

うき世に思ひあふよき潤るありをうと

うき世に思ひあふよき潤るありをうと

衣笠の人

わづらひて今いく程のりまよつて身討しに思ひはるる
後は姓も入道前用白家百三三に

後慈法師

思ひまゝに今いく程のりまよつて身討しに思ひはるる
今下止
歌

藤内人長 基

何しと思ひ持てる方うやふふ命斗に世をいほりて
及三任忠兼

何しと思ひ持てる方うやふふ命斗に世をいほりて
或乾門は歩運

限わら命をうかす世のしにわを思ひはるる

惟宗行経

かゝくくいけを今歌くか思ひ命のこつる
は下兼範

方か程乃しを思ひ持てるにわを思ひはるる
心月法師

心月法師

今我々の今いく程のりまよつて身討しに思ひはるる
源兼朝

今我々の今いく程のりまよつて身討しに思ひはるる

後京時景

歌——か

後堀新地古歌

いひこみ今なる人の福をいづく愁てきくく鬼のそ
む後述懐こいひ——と

後信大古た大た

むらへのりのみのよに面乳いやく香のきく——と

甲——と

源仲業

うまはし——のきく——むらへのりのきりらゆきりよ小

寄鏡述懐

平時廣

乳にみくみをほく——むらへのりよはく——と

堀河地古歌きく——と

基後

むらへのりをみる——ゆき鏡行し——と

述懐のそと

心三信知家

きく——昔いまをぬききく——と

百三のそと

休短能清

ゆく年のにむら神——と

歌——か

通周法師

まよれ神こくある我年——と

前大信正長澄

先月ける去年の年をかく——と

きく——

藤原秀房

かくて世に甘くしぬ身う年へわら喜ぶに我をををを

本懐寄の中に

静には親と

うしこくせん可にけり控くく世よおまれば身結るあね

晋光園入道兼用白丸大夫

大つ方うし世にうけいしと我千方のつくじにう神は世に

常盤井入道兼左大臣

いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

中務卿宗子親と家老志門坊

いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

信女傳抄遺集

わがうしこくしをいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

後原七郎

款留の月日うしこくしをいづれいづれいづれいづれいづれ

大江頼重

いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

源兼成朝臣

いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

直々の漢字多耐 衣笠田大夫

いづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

造乃るし世をうしむる家をわたりて

後三任忠兼

うじりし昔思ひし世中のほろし所うあくこりたるよ

たきは親と家又たまひのよ

三条入道左大臣

くまのつらさるるにこし後しつらさるるに

道は思ひし

續拾遺和詩集卷第十八

雜歌下

懐舊の心を

式乾門院中

まゝの昔をうしむるにけりしをうしむるにけりし

后二位家隆

を乃にうしむるにけりしをうしむるにけりし

雅成親王

侘びれあつしうしむるにけりしをうしむるにけりし

中務少輔宗高親王

長身よりかりしにけりしをうしむるにけりし

水日月のうに我らをみく思ひぬらも共かく
て淡休ける 身も石文も更後成

歌 信實の納を

しうと面りわしく思ひこみしとこれお月のつを
志蓮法師

秋也ふしうの夏も名おえ志の海にのこは月影
休後能清

夏とつて今人にもかきつはいあつとものこり昔を
悲よいにみく後寂勝人對院の八講よは

わくわくは前中納言定家ゆきはに

りけり 前日大長 喜

校りてし年ゆる夏にのころ方きものたなごふいは

中務の宗尊親し家百三言に

前九兵衛信實教定

ふらにいさめりこころか夏の中にもすあまのころを

夏也 大信正道定

又すあまのつちのせむを思ひしは信也つらぬ夏うは

たしゆ片歌

あまのつちのせむを思ひしは信也つらぬ夏うは

後堀河院民平曲成

思ひつらりて一夜の夢くをくみいれはの花をみしこと

ぬ

光明寺入道兼持政大夫

くふゆくに家の命の清原とて所はのむとみううひきよ

此中を因て民平曲成にけりける

大納言通方

今うよまうの周知多うおれはの花も家の言の

藤原忠孝朝を身ゆりかく後うへまでかけ

松子をみく

兼心大夫 下

春情一後一のへち極むくまうくまう入るくこのむ

藤原光朝の御書も入道兼持政の御書所

ましく淡ゆけり 九条兼持政右大夫

わが秋あり草のをまは白屋のうる下こはとひまは

娘の比人の身ゆりかけをなけてさて淡ゆけり

近衛用白左大夫

いしすくの娘のちういと思ひて夏は周より袖は也れけり

諫周の年の娘鳥羽後日夏福門花ありま

けりは兼載に園の上をれくみけるを折る人

にけりける

皇太后文大夫後成

あつて世のまごのみれごあらはまづさるなけりる宿にも有

之後朝を身取りありて後人のうらみして休ける
如くは
は下定回

思つて清のわしの娘はよきうきうよきうきうの
歌しつゝか
よみ人しつゝか

うき人を思ふの春に袖をたてわかれ朝の月をみろふ
道助は親とかくれ休よけは終業は師りせし
よの言にたかく休けらぬものに

信正實珍

うきしてあつてつうのうきよわらう月の氣とくも
堀河のうきとれよとぬるの娘月わらうよ檀中納

言師付のしにりける

檀中納言後忠

この娘はつれもよの娘しつゝのうきとくも
如くは
檀中納言師付

志あつてうきよ月いふわしと面をのうきとくも
九月のうきよ回業を身と后官もゆりわらして
前入納言のしにりける

法成寺入道前持政を改めたる

志乃をうきしつゝのうきとくも我みら月とみろしつゝ
如くは
前入納言のしにり

今つうゝ志の形をよめし小言の秋の月を恋ひ
娘の言母身はうけけるによみかけ

檀大僧都定縁

いふは信々神りてかみしよの愛は娘のちのれは
人のまことけりてはるをきつて淡ゆけ

右道人持通忠女

神馬のまじりてかみしよの愛は娘のちのれは
堀河院かくれうと娘は又節は殿と人引
に我く身右官は母はうとけりて淡ゆけ

堀河院中官と縁

家にもまじりてかみしよの愛は娘のちのれは

如

檀中納言師時

あゝ世の豊のあつたにわんかみしよの愛は娘のちのれは
徳賢門院かくれうと娘は又節は殿と人引
行幸に園しける日雪のつとけりて淡ゆけ
りる人もみしよとけりてはるをきつて淡ゆけ
ける付あゝん所よりえかのまじりて淡ゆけ

堀河

流もみかみしよの行幸にまじりてはるをきつて淡ゆけ
九条九人たかくれあゝん所よりえかのまじりて淡ゆけ

朝雪もくりにあはるる雪にけりたる名馬の雪忠基也

此の雪にけりたる 前入納言為家

此の雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

此の雪にけりたる 名馬門雪忠基

思ひかよふ雪の種も庭の雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

又雪忠基也けりたる後雪の雪にけりたる雪にけりたる

こゝろ雪にけりたる 藤原基隆

ありはるる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

雪の朝は又けりたる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

良心法師

雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

後一位倫子為雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

信實朝也

よのけりたる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

女の思ひかよふ雪にけりたる雪にけりたる

前入納言忠良

雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる雪にけりたる

権入納言長雅

ういれ思名の御しくる人のいづくよにの若きし
後曉義地かくれまを給く又の年の春あまは
わつうとける日換ゆける

禅室上人

わくつとまへる子あふなりくさ風し月日様う些
義福門地かくれまを給けるは素服の人わき
わいとうとけるをみく身々后まへ使後成し
清補朝衣
人あまのわき思役かきおと涙あまはありけりれ
皇々后まへ使後成

墨漬はわき思役かきおと涙あまはありけりれ
又義仲方ありけりは社わきありけり
服まををなけりてよえり

祝部成茂

恨のれ物さうあ思あまは同のまはありけり
歌
蘇人信正慈鎮

しつるまにいらへる御しは世のいづく思あまは
漢壁門地かくれまを給ける人のうきりては
あまに

後堀け民部成茂

あまの世にわき思役かきおと涙あまはありけり

父麻中納言定家すみかける家に年つゝ後
ゆりゆりしくまじひの事を思ひ出く後付
けり
は下覚源

面をかをいりし昔乃ちるつにまじひの事
父身印のりして後よ免る

平親清女妹

いふゆゑに思ひまじりし別れまじりの
に賜は祝と之井ちりまじりかぐれはより
さしつゝに相坂しりて後ける

津守國助

思ひまじりに因りて遠坂をちり道の道に
信せは師にもまじりてわにまじりの事
にうにの事なまじりて書付く後ける
かく身まじりちりまじりて都にまじりて
か乃ちの事なまじりて後ける

蓮せは師

うにの事なまじりて又ちりてまじりて
わにの事なまじりては日族をりける人
ちりてまじりてを因りて後ける
にりける
は蓮せは師

續拾遺和詩集卷第十九

釋教寺

花嚴經の心をよりととれける

後醍醐天皇御製

谷比戸の雨の音をききしとて
花嚴經序品末嘗睡眠の心を

蓮子の親と

あるまじきことをしむる人も有る
十如是の心を淡ゆけりの中に如是性を

後醍醐天皇御製

二内くしとせしきよしけりとも
本末究竟は

本末究竟は

寸毫の差もしとて
蘇中納言定家

蘇中納言定家

わさちの心もささげし
い宿草庵

蓮子の親と

車方庵に年々下り
蘇人僧正慈鎮

蘇人僧正慈鎮

いとくく都の外に車方の庵に
無と寶聚不來自得

身々后文人史後成

甲しひけんとらる月影もしめぬ袖うらには

又百弟子不 祐盛法師

まのつとこいかにいりかき夜うらやまをさす玉たよきほ

天台座主の蒙

わにちをくましほ言よ今より衣の玉れきこもるれ

人訛不 少僧都源信

いみへそのりこぬ有しし甲ふまう今いらふと書

栗和忠厚衣 藤原伊信朝也

我さめにうとと出人のすりと衣をこれ思ふてんるるこ

寶塔不 後漢我沈中製

伊のしと今もかきし月影をせぬ人よと詠てしふ

抱婆品 麻中納言山家

もしめけらけはは道のみを我いもてうく各けの水

我不愛身命 檀大信都宗雅

消てかこつ力にうと結えうてるはは道走の春

寿量不 法眼源兼

世もあつとそねちと人の有るかにけら塵ちをうと

西行法師

我さゆくとらる人乃なりわと詩もみくそ有次の月

我實成佛已未久遠

思順上人

まをくるとれ一水にみるものにはよわ我をよきまづね手將

如是展轉教

前入信正慈鎮

片々ゆくと十の末のよわにわはの氷をくみくまら小

寶積經無有小罪我能加世自他自來こそ

心を

走俊朝夫

一と我やい花よとよわれ一其の極さけいとうちれ

米うととるの比八十の賀一ゆるにがよ

釋教の心を

蓮生法師

はのちわいゆいふけれと我ハ八十の考にわいせは

雙林入滅

田之上人

二月にふたつきたつにこそ考とこの煙いのみをわを

前入信正慈鎮

いにきこのの月うくとよわ考の林わめけかたに

舍利をわんま

赤深信門

わのれんじうにわいぬぬうわ成さるる考考わを

舍利講のにかんよ

後京極抄の前々入末

吹くすうのうとわねいよふとをかくら白家

人目對般若經不應取法不應取非法の心を

檀像正實伊

人の方と我方とひるし之蟬のふり世とを喰ひ
一切賢取皆以無為はる有是別

法下ら答言

あすのけ何^かも我の依^りたり成^り別と^りまじり有^りこ^のけ
意^を所^に行^はせ^し其人

克後朝来

食^るなり^をわ^をを^しら^る初^ら存^し人^のわ^れら^う任^を喰^ひら^ん
三輪三假相續假の^んを

よみ人

然^りて^は何^れと^もい^は月^をや^の山^と思^はれ^ば我^のす^らひ^らる^は

檀波羅峯を 赤嶺雅純

黒^うつ^かなり^の山^の人^の神^とし^て影^をお^ぼえ^らる^はの^ん月^輪
人^の月^輪の^んを^影く^ん海^{上人}日^にけ^り

按察使隆尚

し^らの^んの^くも^らぬ^月は^らり^く海^を影^をく^ん

如^く 心海上人

胸^のう^らは^しし^月影^の外^は又^もう^く影^をく^んの^んわ^る

釋^のあ^まの^中人 慶^の上人

し^らの^んの^くも^らぬ^月は^らり^く海^を影^をく^んの^んわ^る
月

法界唯心

亦持信正宗性

多し者も人のうらよ有ゆをわしといへんはあし

空即そまの心を 麻大徳正道玄

善法乃花とみまも却るてしやうまうほく笑

二葉成佛の心を 法下定回

わつあくとわねみしと思ふはあくにう花は咲かれ

弘治元年百背年ちあけの時釋教

衣笠の大夫

思ひこもつて江はさうとてれは氷の外なるあや

觀云号壽行氷想觀



後醍醐天皇御製

氷の面にうりつとらりね氣。祐すみにうけんをいそ死

上定教等廻向達證之身

信中約言經年

空の月影乃花のおけり

在世尊抱滅後凡夫同被照攝取光明も

んを 同之人

くわうやく人のふまのよをじのまに照す月を

九品可讀ゆける中より下品下せを

禪之上人

夕日けりまゝしめて雲ちよらぬわたりぬきく
弥陀地力の心をよまける

信せは平

よりうらぬしづしわよふ舟みらむく汐の波はほて
日弁はと侍をかくし免ら

は眼後使

うらぬはなをさうりし思ひもは人の心にいづら
月をかく

少信都源信

うらぬいづらその月をれいのまうにみくわ
女養即寂走の心を



は平は平

西日のとすじこふしう静なるをりうくそ思有次の月
忙く六道をさく板の心を

蓮せは平

た乃道わたりうらぬわぬはぬれわたりしこいし
十叟のう後かけるよ人叟を
は眼源兼

うらぬしづしづの程はいよらぬしづのなは又何はひな
高弁と人のよしはゆりかて後またりける

少信は平

楓のころはの言はく末届くも控ぬめくみよいさわを
一流の書と申玉体さく

藤原正成源

谷川のわりの流かこころ後よりけさこころより
後よきをみく後かける

法下乙澄

くさひらわりのあり秋末より冬へ冬へ谷川の氷
十戒の中にも不偷盜戒

前入納言為家

こころみみまはるる白波の三回の上は月名とす

信實朝臣

木邦姪戒

この井のわのねをみる外は又わさせら氷を

くさひらわ

指中納言也方

神垣ツツミよりいへるおぬ清水月もくもく影かげの池いけ

まゝ

後美上報院所製

男も老くはちの好契わらひにくく杖も林うさぎ

正三位志保

う乃のまゆゆさるる男よりの外幸おはせかき

石清水いしづみの社より幸あつり時よりと経ついで

太上天皇

いづ水さるわが我乃にいをい我世の事ことを林はやしに記しる

寛治元年十一月今日に社頭祝

入道内大臣

夫のまゆゆさるる清水ききる流ながの池いけの末

寛治三年四月京極入道兼用白後二条用白

日大長に依けつをわいことすいへ賀茂社所

てけり所演まゆけり 肥後

まゆ草くさもまゆゆさるるまゆゆさるるまゆゆさるる

今社よりいへるおぬ清水月もくもく影かげの池いけ

賀茂氏久

たの代よいりまをまへて柳やなぎのまかりしと林はやしのうへ

中納言よ依けり所演まゆけり 賀茂社よりいへる

にがくに林の枝を折く事請ふける後
つゝ賀茂の季保のせしむにけり

後古門の人

ちよもろ林に折るを郵林の枝ぬきつるに我

也

賀茂季保

林に折るを郵林の枝ぬきつるに我

社頭花のつるをよめる

賀茂季保

林は笑ふ花をみくもむに凡かす我の世を

もく

後古門の人

ちよもろ林をいりらの林にわれはつるをけり

後古門の人

思ひに神は新やつるの秋の有わを志月

光明寺も入道前松政家八月十二日

正月

後古門の人

去日この林に折るをみくもむに我

林に折るを

中尾裕賢

つるをみくもむに我の世を

前古門の人

林に折るをみくもむに我の世を

浪ゆきいづるはらの松う木のころそん

位吉日あつて後ろ ありは師

位吉乃松のあつて浪の言を梢しかく申し

ら昔三年日裏こく名所松こいふそん

にうう月じりきた 前入納言良教

すみりのきつてきき松のに秋成をうけて

片夫松正松の松日けく人言成日せりけ

に女命日かりりく常盤井入道前を故人を

にりりあけけるをみく後に後ろそん

休ける 津守國平

位一の松よひあひのくにわりのそそ

と東門地延吉の社にゆいそと後ける

て後休ける 檀大納言も家

位一の序に人をさしけりあつてきき

日吉乃社に御幸の付よりと後ける

後延教院也

みらのれに我世を林よ延るそん

前入道言あつて社こく人くそん

休けるそん言あつて

入道入道

天くころ林を日都にわらうくまらぬれ世をわら
うたふるまふけけら淡ゆけ

天台庵より書

日都に人のいじりまをいりるれくまらぬれ世をわら

秋祇言の中

澄覚は親

くまらぬれ日都のけをれゆらうくまらぬれ世をわら

人乃らつるまにまらぬれ世のまらぬれ世をわら

けらまらぬれ世のまらぬれ世をわら

あ

祝部成層

くまらぬれ日都のけをれゆらうくまらぬれ世をわら

大文にふりしをけけら

信女信林良仁

庭の勢をわらぬのたのまらぬれ世をわら

客人のまらぬれ世のまらぬれ世をわら

よき人

いよの勢をわらぬのたのまらぬれ世をわら

又元元年十月後漢義徳奉祐りし事わら

けら日香のつとけけら淡ゆけ

祝部成良

林垣のまらぬれ世のまらぬれ世をわら

この本の本地の心を 祝戸園長

すゑの世おききまじりく先こころ人よまじりくふちのいん

く 頃茂氏久

先の世を林つうくくしめ志を繩思へるくつう人下りか

此林文

わりのけらみこにむら松くよくよめはね林くいん

貞治元年十月五日 命は社頭祝

入道者人長

林垣のくま下凡のくくしてこころ恨のなまこ世をわめ

秋祇の心をよとぬけ

まこと天身

今も松久くくも我ちらやも林のくにの世をまじり

く 前抄改左人長

園くかく民をくく朝夕よりけてる祈を林のゆり

右無法僧基氏

ふ早振林のみまじりしめめの方世くけていんふくく

後述と秋林の世

林よりゆあみの鏡をくく林の園より我國く

弘治元年百三十一日 命は社頭祝

前大納言基家

林業のからしぬ多し年ありて林代々しつ天のく

徳野は田のくきぬけり付いり付いり

やうとぬけり 花は花のき

いり何しき人のちけれ林とま

林業のからしぬ多し年ありて林代々しつ天のく

徳野は田のくきぬけり付いり付いり

やうとぬけり 花は花のき

いり何しき人のちけれ林とま

林業のからしぬ多し年ありて林代々しつ天のく

徳野は田のくきぬけり付いり付いり

林業のからしぬ

林業のからしぬ多し年ありて林代々しつ天のく

天明十年六月十日

信下公助

右以照之何多沙年
三年
公受牙八治洗福七
孫

正住

此段文字...
正住



